

多気遺跡群発掘調査報告Ⅱ

～一志郡美杉村下多気字上村所在～

1996・3

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢の国の中でも山間部に位置している美杉村には、数多くの秘められた文化財が眠っているといわれています。その中でも、上多気・下多気地区には著名な国指定名勝及び史跡「北畠氏館跡庭園」があり、全国から観光客が訪れています。

この上多気・下多気は、かつては2地区を含めて「多気」と呼ばれた地域で、南北朝時代から戦国時代にかけての大名北畠氏が本拠を置いたところであります。北畠氏は中・南伊勢を中心に、南伊賀さらには大和宇陀地域までをも何らかのかたちで支配していた大名であります。そのような点からすれば、当地はいわば当時の北畠氏支配地域内の中心都市として存在していたものと言えるもので、その歴史的価値は非常に高いものであると言えるでしょう。

上多気・下多気には現在もいくつかの北畠氏時代の旧跡を見ることができますが、開発は少なく、それに先立つ発掘調査の機会もあまりありませんでした。自然に満ち溢れた落ちついた景観を保持しています当地は、そのためもあって交通事情は決して良くはなく、早急な交通網整備が望まれていました。今回の発掘調査は県道嬉野美杉線の道路拡幅工事に先立って行われたものであります。

今回の調査は、決して規模の大きな調査ではありませんでした。しかし、多気の、ひいては北畠氏の歴史学的な解明のための一助となるような成果であったと思います。川沿いの狭い地域にまで北畠氏の時代に華麗な生活が営まれていたことは、とりもなおさず、多気のかつての繁栄の証と言えましょう。この調査によって得られました結果を一つの資料として、北畠氏が形成した「都市遺跡」への関心が高まって、文化財保護の重要性を考えて頂ければと思います。

なお、調査に際しましては、地元上多気・下多気・丹生俣の方々、美杉村教育委員会、県土木部道路建設課・久居土木事務所の関係各位からは、多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末ながら記して深く感謝の意を表します。

1996年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 川村政敬

例 言

- 1 本書は、美杉村下多気字上村^{かまき}に所在する多気遺跡群（上村地区）の発掘調査報告書である。
- 2 この遺跡は、主要地方道嬉野美杉線県単道路改良工事に伴い緊急発掘調査を実施したものである。
- 3 今回調査した地区は、室町から戦国時代にかけての大名である北畠氏が関係して整備したと考えられる都市遺跡の一部を構成している。したがって、今回はこれらの遺跡の総称として「多気遺跡群」と呼称している。
- 4 調査は、平成7年5～6月に実施した。調査の体制は以下の通りである。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査第1課 主事 越賀弘幸 技師 伊藤裕偉
- 5 調査にあたっては、地元上多気・下多気・丹生保の方々、美杉村教育委員会、美杉村建設課、および県土木部道路建設課・久居土木事務所からの協力を得た。
- 6 報告書作成にあたっては、岡野友彦氏（皇學館大学）、古賀秀策氏（京都大学）、鋤柄俊夫氏（(財)大阪府文化財調査研究センター）、藤田達生氏（三重大学）の有益な御教示を得た。
- 7 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第1課および管理指導課が行い、以下の者が補助した。写真の撮影および執筆は越賀・伊藤が、全体の編集は越賀が行った。
足立純子、有川芳子、石橋秀美、井田美奈子、井村浩子、柿原清子、川口 愛、楠 純子、倉田由起子、小林佳代子、須田幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田依里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本春美、松月浩子、森島公子、柳田敬子
- 8 挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏6°20′（昭和62年、国土地理院）である。
- 9 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。
- 10 遺構は、調査区での通し番号としているが、ピットは各小グリッド毎で番号を与えている。また、各遺構の形態によって頭に付ける略記号が異なっている。その付け方は、以下のような方法を原則としている。
S A……………柱列 S K……………土坑
S B……………掘立柱建物 S Z……………落ち込み・石列・石垣その他
S D……………溝 pit……………ピット・柱穴
S F……………竈・窯状遺構
11. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前言	(越賀弘幸)	1
1. 調査の契機		1
2. 調査の経過		1
3. 調査の方法		2
II 位置と環境	(越賀弘幸)	2
1. 地理的環境		2
2. 歴史的環境		2
III 調査の成果—層位と遺構—	(越賀弘幸)	6
1. 基本層位		6
2. 遺構		6
IV 調査の成果—出土遺物—	(伊藤裕偉)	13
V 調査のまとめと検討	(越賀弘幸・伊藤裕偉)	30
1. 中世前期		30
2. 中世後期		31

写真図版目次

PL. 1 調査区遺構(1)	PL. 4 調査区遺構(4)	PL. 7 出土遺物(2)
PL. 2 調査区遺構(2)	PL. 5 調査区遺構(5)	PL. 8 出土遺物(3)
PL. 3 調査区遺構(3)	PL. 6 出土遺物(1)	PL. 9 出土遺物(4)

挿図目次

fig.1 多気周辺地形図	3	fig.10 出土遺物(1)	23
fig.2 多気地区関連遺跡位置図	4	fig.11 出土遺物(2)	24
fig.3 調査区周辺地形図	5	fig.12 出土遺物(3)	25
fig.4 調査区平面図	7	fig.13 出土遺物(4)	26
fig.5 調査区土層断面図	8	fig.14 出土遺物(5)	27
fig.6 SB12・15、SA14・16平面・断面図	10	fig.15 出土遺物(6)	28
		fig.16 出土遺物(7)	29
fig.7 SF2平面・断面図	11	fig.17 掘立柱建物・柱列配置図	31
fig.8 SF7平面・断面図	12	fig.18 重ね焼き痕のある土師器皿模式図	
fig.9 c7グリッドpit3平面・断面図	13		32

表目次

tab.1 出土遺物観察表(1)	15	tab.9 出土瓦観察表	22
tab.2 出土遺物観察表(2)	16	tab.10 出土石製品観察表	22
tab.3 出土遺物観察表(3)	17	tab.11 出土鑄貨一覧表	22
tab.4 出土遺物観察表(4)	18	tab.12 出土金属製品観察表	22
tab.5 出土遺物観察表(5)	19	tab.13 多気遺跡群上村地区における12世紀後葉から13世紀前葉頃の土器組成	30
tab.6 出土遺物観察表(6)	20		
tab.7 出土遺物観察表(7)	21	tab.14 県内犬形土製品出土遺跡一覧(補遺)	
tab.8 出土遺物観察表(8)	22		32

I 前 言

1. 調査の契機

主要地方道嬉野美杉線は、嬉野町と美杉村多気を結ぶ県道である。この道は、かつての多気から各方面に通ずる7つの峠のうちの白口峠越えで多気と宇気郷を結ぶ、一説に多気城の表門ともいわれる。これは、多気盆地を八手俣川沿いに走り、上多気の地でかつての「伊勢本街道」にあたる国道368号線と交差し、国道422号線につながる道である。

この道路改良事業は、多気盆地内を南北に走る幹線道であるにもかかわらず、狭隘な道路であったため、早急な整備が必要とされてきたものである。

美杉村は、かつて伊勢から伊賀・大和の一部を領有していた大名・北畠氏が本拠地としていたところであり、極めて価値の高い埋蔵文化財の包蔵地域であることが次第に明らかになりつつある。

今回の事業予定地内における埋蔵文化財の範囲を確定するために、平成4年度と5年度に試掘調査を実施した。その結果、八手俣川沿いの狭い箇所ではあったが、約520㎡で遺構・遺物の存在を確認し、本調査必要範囲として確定した。

2. 調査の経過

今回の発掘調査は、平成7年5月17日から開始し、同年6月26日に全て完了した。最終的な調査面積は520㎡である。

調査区は現道より2～3m低い水田で、作業中は自動車が頭上を行き交うといった状態であった。そしてその補強用の石垣も崩れかけの危険箇所があり、安全を考慮し、元来狭かった調査区の幅をさらに狭くせざるをえなかった。大量の出土遺物や拡張調査、さらには雨天による作業中止などもあったが、作業に邁進していただいた地元各位の熱意と暖かいご配慮によって、無事調査を終了することができた。特に、地元の宮崎洋史氏、奥野友一氏には格別のご支援とご配慮を頂いた。また、現地調査に参加していただいた方々のご協力に対し、ここにご芳名を記して感謝の意を表したい。

石橋直蔵 黒田辰郎 鈴木和二 鈴木喜三郎
辻村良和 中山邦男 石橋賀江 小林はる
芝山佳子 鈴木由紀子 田中時枝 辻 こま
辻 鈴代 平尾しげみ 松崎祐理子 宮崎久美子
安野ぎん (敬称略、順不同)

なお、調査の経過は以下の日誌抄を参照されたい。

調査日誌 (抄)

平成7年5月12日 道具搬入。

5月17日 表土掘削。

5月18日 地区杭設定。
5月19日 作業員投入。調査区の北端、南端から検出・掘削開始。南部炭層上部から土師器多数出土。
5月22日 雨天のため作業中止。
5月23日 北端で竈跡SF2と9尺等間の柱列の検出。南端で石垣検出。(近世)
5月24日 北は遺構検出、掘削。南は石垣検出。別方向でちょっと立派な石垣検出。
5月25日 27ラインまでの遺構掘削とSF2の掘削。
5月26日 検出、掘削の続行。
5月29日 雨天のため作業中止。
5月30日 多気小学校1年生見学。窯跡? SF7検出。
5月31日 SF2の実測。
6月1日 SF7拡張部分検出。SD3・10掘削。SZ11検出・掘削中、多量の土師器出土。多気小学校3、4、6年生見学。株式会社イビソクによる座標測量開始。
6月2日 SZ11の検出、掘削とSD3・10、SF7掘削。北調査区検出開始。石列発見。多気小学校5年生見学。
6月5日 SZ11から完形の土師皿多数出土。北調査区から新たに石列出土。多気小学校2

年生、美杉中学校2年生見学。株式会社イビソク測量終了。

6月6日 SZ11土器取り上げ。北調査区の検出中に犬形土製品出土。伝本願寺跡・伝誉永寺跡付近の県道の工事が始まっていると通報を受ける。

6月7日 現地説明会記者発表。ロクロ土師皿ほぼ完形で出土。名古屋テレビ取材。

6月8日 雨天のため作業中止。

6月9日 午後から現地説明会準備。

6月10日 現地説明会当日。朝からの準備中に掘立

柱建物の廂らしい柱列発見。約150人の参加があった。

6月12～14日 雨天のため作業中止。

6月15日 全調査区最後の仕上げ。

6月16日 本日にて掘削作業終了。写真撮影。

6月19日 実測準備。

6月20～24日 遺構実測。

6月26日 朝から大雨の中、SF7埋め戻しと溝の掘り残し部分掘削。これにて現地での調査は全て終了。午後から道具撤収。

3. 調査の方法

a. 小地区設定について

今回の調査区は、製材工場付近の工事終了地区を挟んで南北2地区に分かれていた。調査時点では、それぞれ「北調査区」「南調査区」と仮称し、小地区設定を行った。小地区は4m×4mの正方形を1グリッドとして行った。両地区の小地区設定および

座標軸はfig.4に示している。なお、この小地区設定は座標軸とは全く無関係である。

b. 遺構図面について

調査区全体の平面図は1/20で作成した。個別遺構図については1/10を基本としたが、各遺構・遺物の状況によって違った縮尺のものもある。

II 位置と環境

1. 地理的環境

今回の調査地は、行政的には三重県一志郡美杉村下多気字上村（かむら）である。この下多気は八手俣川とその支流によって形成された谷の下手に相当し、上手には上多気がある。上多気・下多気は、近世・近代には行政的にはそれぞれが別の村であった。しかし、この2地区は地形的に連続し、この2地区で一定の領域を形成していることは明白である。したがって、上多気・下多気を総称して「多気」の名

称を用いることとする。

多気は、八手俣川とその支流によって形成された盆地状を呈する谷で、平地部の標高は約310～340mである。八手俣川水系は、丹生俣地区から流れる八手俣川本流と、立川地区方面から流れる支流の立川川とを合流し、北流する。今回の調査地は合流地点から北に約1kmほど下流の標高約315mの左岸低位段丘上に位置する。

2. 歴史的環境

多気の歴史的環境については、平成4年度の報告書^①でほとんど触れているので、ここでは繰り返さないこととする。要点としては、中世における北畠氏の拠点として機能していたこと、その期間は14世紀中葉頃から16世紀後葉頃に至る、いわゆる守護・戦国大名級の拠点としては全国的に見ても長期にわたること、北畠氏時代に多様な拠点整備がなさ

れたこと、である。

なお、平成5年度にはナショナル・トラストの調査が入り、さらに詳細な状況が確認されている^②。

以下では、それらも踏まえて平成4年度以降に判明したことを中心に少し触れておく。

下多気・上村小田地区の現西向院前の田（伝薬師寺跡南）における駐車場造成時に、多数の石仏が確

認されている^③。当該事業に並行して行われた試掘調査によりこの地域にも遺跡の広がっていることが確認された。また同地区の消防団詰所兼格納庫建設時に、鎌倉時代の土坑数基と室町時代の掘立柱建物1棟が確認された^④。

本調査と前後し、上多気・小津地区において伝誉永寺跡・伝本願寺跡の調査が行われた。伝誉永寺跡では調査前の不手際によりほとんど調査できず、か

つての庄司峠越えの街道とされる道の一部と、土層断面のみが確認された。伝本願寺跡では、縄文時代後期の竪穴住居の残骸と考えられる土坑1基と室町から戦国時代の掘立柱建物1棟・土坑数基・溝1条など、北畠氏と多気の関係を考えていく上で重要な遺構がいくつか確認された^⑤。

上村地区について

今回調査を行った箇所は、北畠氏館跡（現北畠神



fig.1 多気周辺地形図（1：50,000）（国土地理院『伊勢奥津』『宮前』1／25,000から）

- 1.北畠氏館跡 2.霧山城跡 3.土井沖調査区 4.伝誉永寺跡・伝本願寺跡 5.東川遺跡 6.今回の調査区

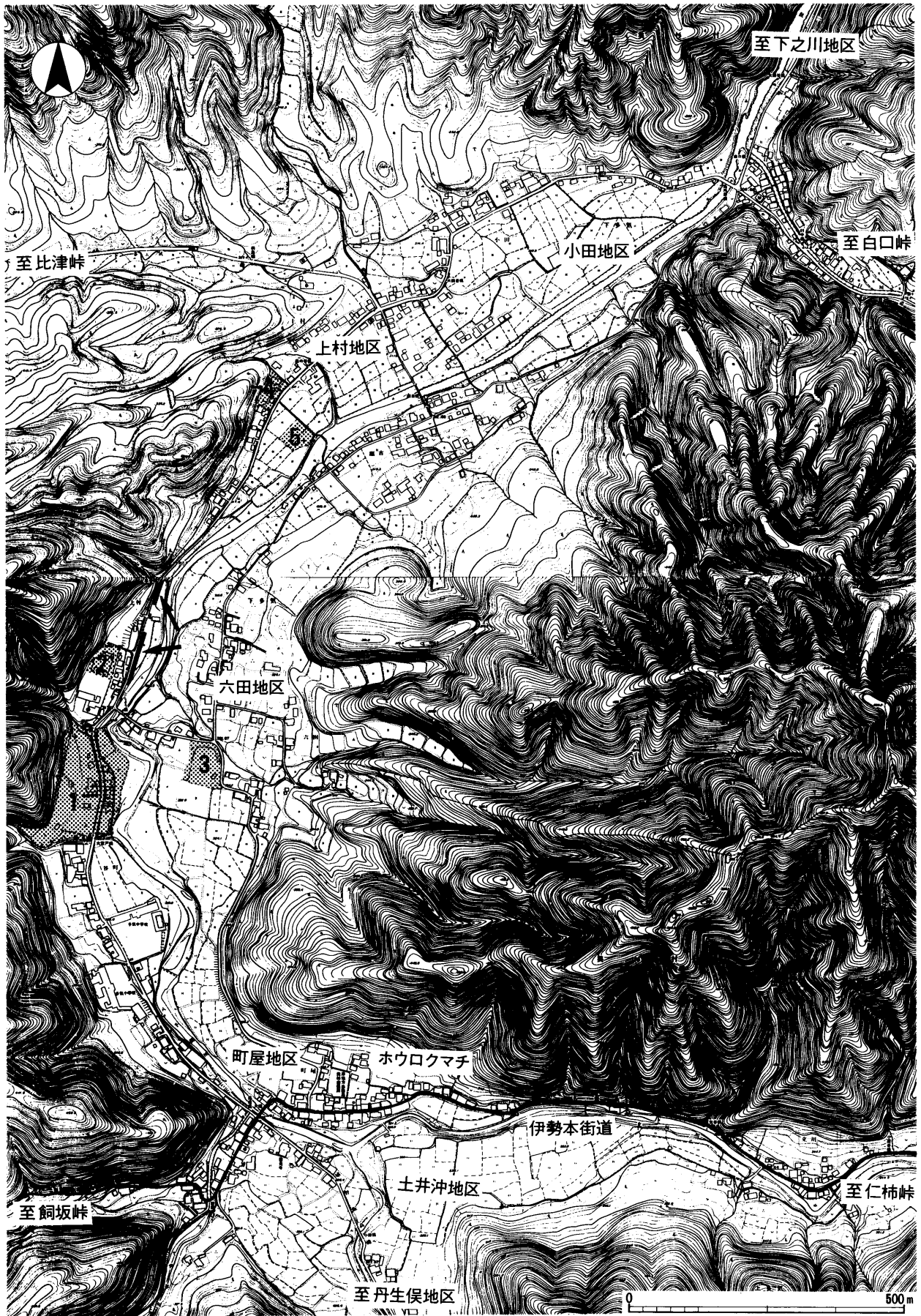


fig.2 多気地区関連遺跡位置図 (1 : 10,000)

1. 北畠氏館跡 2. 伝福寿院跡 3. 六田館跡 (東御所) 4. 西向院 5. 伝薬師寺跡 ■は、今回調査区

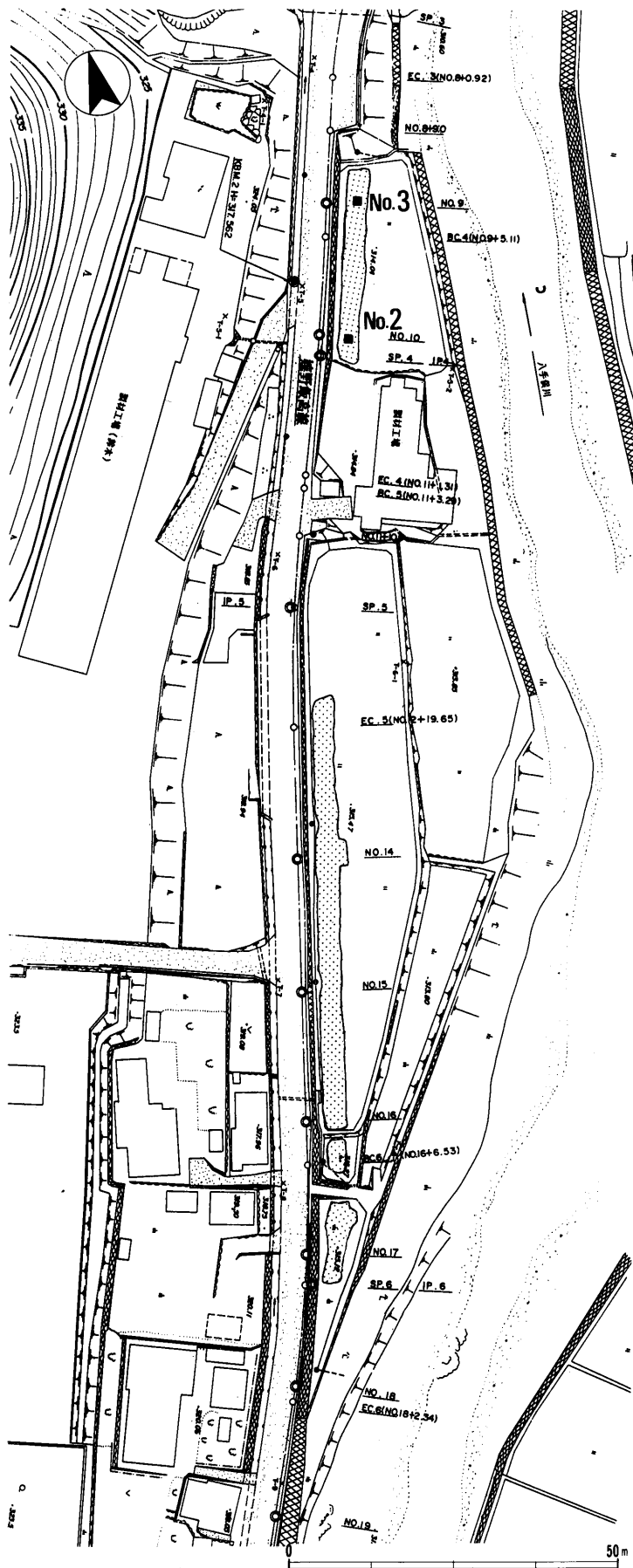


fig. 3 調査区周辺地形図 (1 : 1,000) ■は平成5年度試掘坑

社)の北約200mに位置する。六田館跡(「東御所」の伝承地)などがある対岸の六田地区や、同じ上村地区でもやや下流部の西向院周辺では比較的広い段丘面を形成しているのに対し、上村地区の中でも南寄りの伝福寿院跡(現保育所)と八手俣川の間位置する狭い場所である^⑥。

また、調査区西側の製材工場建設時に多量の出土遺物があったという情報も得た^⑦。(越賀弘幸)

註

- ①伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告書』(三重県埋蔵文化財センター 1993)
- ②古賀秀策『美杉村・多気の地域文化財』(『美杉村・多気の歴史的遺産調査』(財)日本ナショナル・トラスト 1994)
- ③『三重県埋蔵文化財センター年報6』(三重県埋蔵文化財センター 1995)
- ④1995年度調査
- ⑤伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』(三重県埋蔵文化財センター 1996)
- ⑥fig.2 参照
- ⑦地元での聞き取りによる。

Ⅲ 調査の成果 一層位と遺構一

1. 基本層位

調査区は、八手俣川中流域の低位段丘上に位置する。現況は標高約315mの水田である。南北2本の谷と八手俣川に挟まれた狭い箇所であるため、丘陵突端部と表現した方が適切かも知れない。

基本層位はfig.5に示したとおりであるが、北調査区と南調査区では若干の相違があるため、ここで少し述べておく。

北調査区においては、岩盤を含む基盤層の上に堆積している灰褐色系土層が遺物包含層である。これらの層からは、重ね焼き痕のある土師器皿が一括出土しており、犬形土製品や五輪塔火輪、石列なども

発見されている。出土遺物などから、中世末期に形成された整地土と考えられる。

南調査区においては淡黄色系砂の基盤上に堆積する灰褐色系土が遺物包含層である。ただし、調査区36～39ラインでは落ち込み遺構が深く、トレンチ状に細い調査区では危険を伴うため、基盤の確認はできなかった。また、41～44ライン付近で近世以降と思われる石垣が検出された。川に向かって低くなっていく地形であることは予測できるが、ここでも基盤層の確認はできなかった。

2. 遺構

今回の調査では12世紀末から13世紀初頭頃と北畠氏の関連と考えられる15世紀末から16世紀代頃の遺構が確認された。つまり北畠氏入部以前と以後とに分けることができる。

1) 北畠氏入部以前の遺構

この時期の遺構には、溝3条がある。

溝SD1 a23～b24グリッドで検出した遺構である。検出延長約3.5m、幅約0.6m、深さ約0.5mで断面は逆台形状を呈する。出土遺物としては土師器甕があるが、量は少ない。

溝SD3 a24～a36グリッドで検出した遺構である。調査区とほぼ並行して南北に走り、検出延長約50m、幅約1.2m、深さ約0.5mの溝で、断面は弧状を呈する。北部は調査区外西側から始まり南部で八手俣川へ流れ込んでいたと推定され、SZ11に切られている。埋土中からは瓦器椀や山茶椀など12世紀末から13世紀前葉の遺物が出土している。

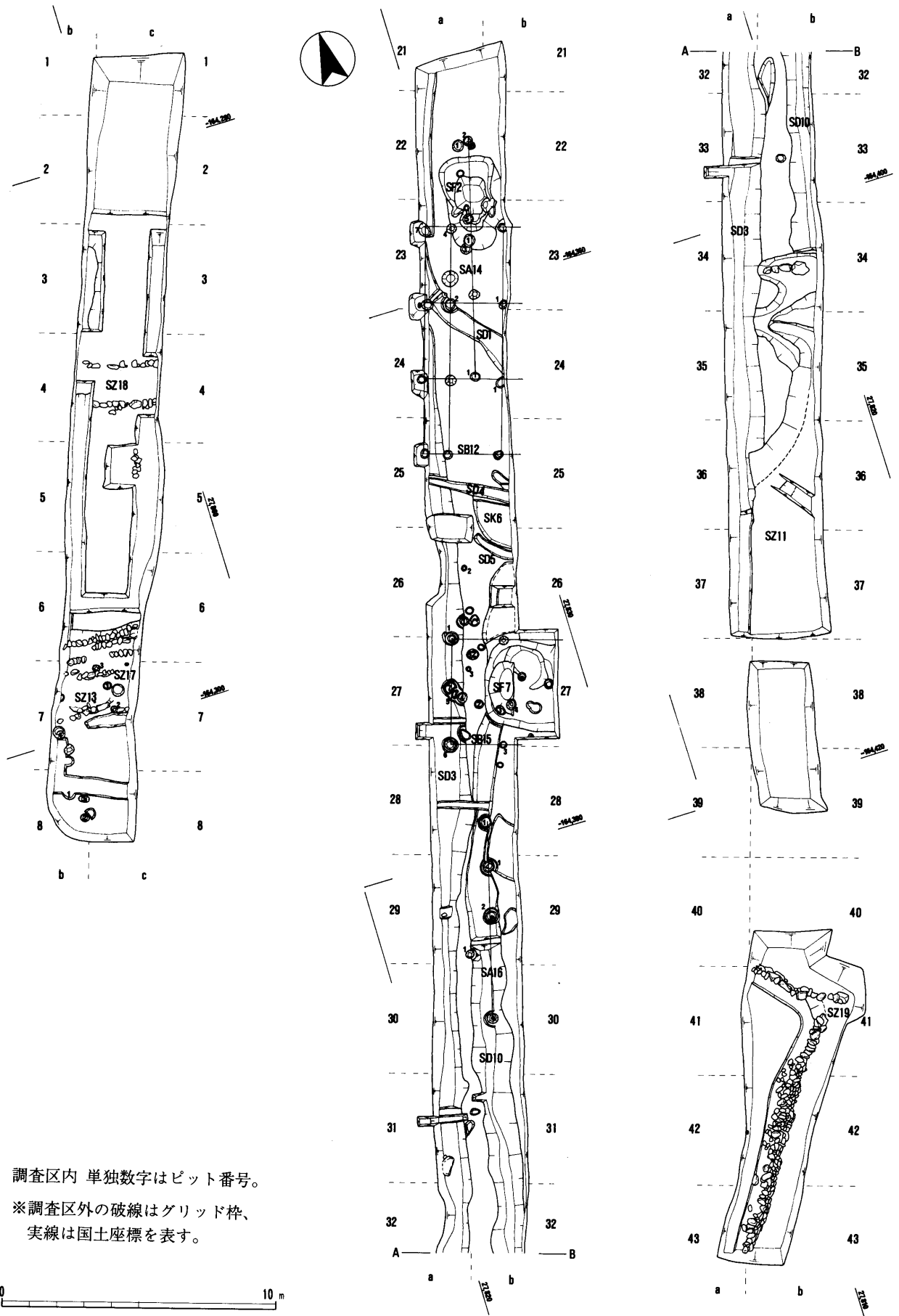
溝SD10 b26～b34グリッドで検出した遺構である。検出延長約30m、幅約1.2m、深さ約0.8mで、断面は逆台形状を呈する。埋土中からは平安時代末から鎌倉時代前葉と思われる土器が出土している。検出面ではSD3に切られている。しかし出土遺物では明確にすることができない。

2) 北畠氏入部後の遺構

北畠氏の関連と考えられる中世の遺構は、掘立柱建物・柱列・竈・窯状遺構・土坑・落ち込み・溝の他、多数のピットがある。およそ15世紀末から16世紀後半にかけてのものが認められる。

掘立柱建物SB12(fig. 6) a23～b25グリッドで検出した遺構である。南北3間(約8.4m)以上で東西2間(約2.85m)以上の総柱建物と思われる。東部は調査区外に広がる。南部はSK6と攪乱によって南北4間目の確認はできなかった。柱間は、南北方向が約2.7m(1尺を30.3cmとすると9尺)、東西方向が約1.95m(同6尺5寸)と約0.9m(同3尺)である。柱間や地形から考えて3尺の間は西面廂と思われる。柱穴からは銅銭(宋通元宝)・15世紀代の播鉢・金箔装の銅製品が出土しているが、SD1・3やSF2掘形を切っていることなどから、建物の時期は16世紀前半頃と考えられる。

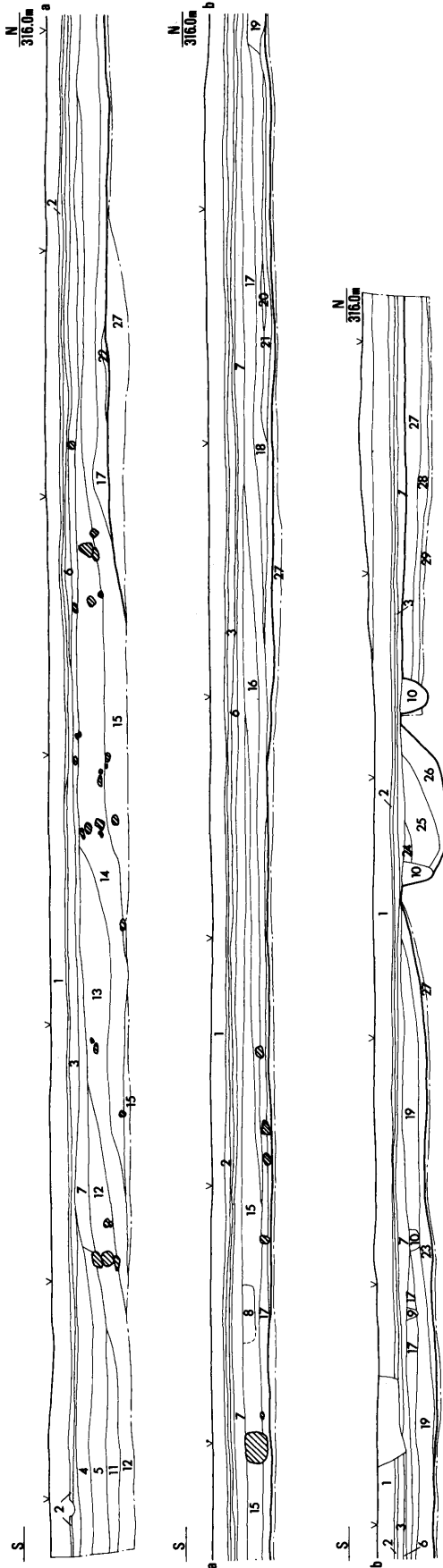
掘立柱建物SB15(fig. 6) a27とb27グリッドで検出した遺構である。南北2間(約3.9m)、東西1間(約1.95m)以上の側柱建物と思われる。東部は調査区外に広がり、棟方向は不明である。柱間は、東西南北両方向ともに約1.95m(6尺5寸)である。SD3を切っていることから、それ以後と言えるの



調査区内 単独数字はピット番号。
 ※調査区外の破線はグリッド枠、
 実線は国土座標を表す。

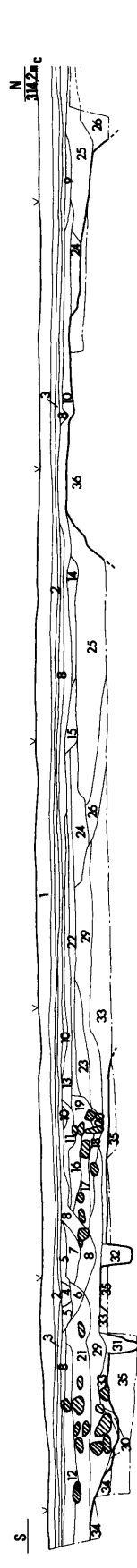
fig.4 調査区平面図 (1:200)

南調査区西壁



- 1 暗灰色粘質土 (耕土)
- 2 暗灰色やや砂質土 (旧耕土)
- 3 明灰色やや砂質土 (床土)
- 4 灰褐色土 (SZ11埋土4)
- 5 暗褐色やや粘質土 (SZ11埋土3)
- 6 明褐色砂質土 (旧床土?)
- 7 暗褐色やや粘質土 黒粒混じり
- 8 灰褐色土 (不明遺構)
- 9 暗褐色粘質土 (SD4埋土)
- 10 暗褐色土 (SR12柱穴)
- 11 炭層 (SZ11埋土2)
- 12 灰褐色砂質土 (SZ11埋土1)
- 13 灰褐色やや砂質土 (SD3埋土9)
- 14 暗褐色砂質土 砂70%含む (SD3埋土8)
- 15 暗褐色砂質土 (SD3埋土7)
- 16 暗褐色粘質土 (SD3埋土6)
- 17 暗黄褐色砂質土 (SD3埋土5)
- 18 淡黄褐色砂質土 (SD3埋土4)
- 19 黄褐色砂質土 (18と同じ?)
- 20 暗褐色やや砂質土 (SD3埋土3)
- 21 暗褐色やや粘質土 (SD3埋土2)
- 22 黄灰色砂質土 灰褐70%混じり (SD3埋土1)
- 23 黄灰色砂質土 (22と同じ?)
- 24 灰褐色やや砂質土 (SD1埋土3)
- 25 暗灰褐色土 砂混じり (SD1埋土2)
- 26 暗灰褐色やや粘質土 砂混じり (SD1埋土1)
- 27 黄灰色細砂 (基盤層・北調査区の34?)
- 28 淡黄灰色細砂 (基盤層・北調査区の35?)
- 29 灰褐色細砂 (基盤層)

北調査区西壁



- 1 耕土
- 2 旧耕土
- 3 床土
- 4 緑味灰褐色土
- 5 灰褐色砂質土 褐色粒やや含む
- 6 灰・礫混じり灰褐色土
- 7 暗灰褐色砂質土 灰・礫混じり、土器片やや多め
- 8 黄味灰褐色砂質土 褐色粒含む
- 9 淡灰褐色砂質土 黄色粘土70%含む
- 10 淡灰褐色土 黄色粘土70%含む
- 11 黄灰色砂質土 暗褐色粒灰褐70%多く含む
- 12 暗褐色粗砂 灰・小礫混じり
- 13 暗灰褐色砂質土 黒色粒含む
- 14 暗褐色砂質土 小礫多く含む
- 15 淡褐色砂質土 小礫・淡褐70%含む
- 16 淡褐色細砂 黒色粒含む
- 17 淡灰色砂質土 黄色粘土70%含む
- 18 淡褐色粘質シルト
- 19 灰褐色土 淡黄褐色濃多く含む (石垣裏込)
- 20 淡褐色細砂 (石垣裏込)
- 21 灰褐色土 淡黄褐色小礫多く含む
- 22 灰褐色土 大礫・灰多く含む
- 23 暗灰褐色砂質土 灰多い
- 24 淡灰褐色土 淡黄褐色小礫多い
- 25 淡黄灰褐色砂質土 小礫混じり
- 26 暗灰褐色砂質土 灰・小礫混じり
- 27 赤味褐色粗砂 灰褐色土含む
- 28 灰褐色砂質土 礫多い
- 29 灰褐色砂質土 灰・褐色粒混じり
- 30 黄褐色砂質シルト 灰褐70%含む
- 31 暗灰褐色砂質土 (p1埋土)
- 32 淡灰褐色砂質土 やや赤味
- 33 淡黄灰色砂質土 灰褐小70%含む
- 34 黄灰色細砂 (基盤層)
- 35 淡黄灰色細砂 (基盤層)
- 36 赤味淡黄灰色土の岩盤 (基盤)

fig.5 調査区土層断面図 (1:100)

みで、明確な時期は不詳である。なお、S F 7との関係では、S F 7掘形埋土とピット埋土はよく似ており、掘形埋土を掘削した後にピットを検出した。ただし、切り合い関係は不明である。S F 7を囲む建物の可能性もある。

柱列S A 14 (fig. 6) a22～a24グリッドで検出した遺構である。3間分約8.6 mを確認した。尺換算すると28尺5寸となる。S F 2 埋没以降のものと考えられるが、S B 12との時期関係は不明である。**柱列S A 16**(fig. 6) a28～a30グリッドで検出した遺構である。4間分7.2 mの柱列と思われるが、南から2基目のピットについては確認できなかった。尺計算すると24尺となる。北から2基目のピット内には1辺約20cmの方形の石が1個、北から3基目のピット内には拳大の石が3個重なって確認された。礎石である可能性もある。なお、3基目のピットの西側約1.8 mのS D 3埋土内にも1辺約15cmの石が確認されており、建物として西側に広がる可能性もある。**溝S D 4・5** a25、b25グリッドおよびb26グリッド付近で検出した遺構である。それぞれ検出延長約3 m、幅約0.4 m、深さ約0.2 m・検出延長約1.5 m、幅約0.3 m、深さ約0.2 mの溝である。双方とも出土遺物がほとんどなく、時期、性格ともに不明である。

土坑S K 6 b25グリッド付近に位置する。約1.5 m×約1.3 mで検出面からの深さは約0.1 mである。S D 4とS D 5に切られているほかは出土遺物もほとんどなく、時期、性格ともに不明である。

土坑S K 9 b27グリッドで検出したS F 7を切る土坑状の遺構である。検出面では確認できたが、掘削中にはS F 7埋土との明確な差異が認められなかったことから、浅いくぼみであったと考えられる。

竈S F 2 (fig. 7) a22～b23グリッド付近で検出した遺構である。南北約0.7 m、東西約0.7 mの半地下式の竈である。南に竈本体、北に作業場と考えられる前庭部がある。本体床面は赤く焼け締まっており、北に向かって開口している。本体中央部は廃絶後のピットによって破壊されている。開口部両脇は袖状をなしており、盛土下は双方ともピット状の窪みとなる。前庭部は南北約2.0 m、東西約1.8 mの土坑状をなす。土坑の中央付近から北端にかけての

床面には厚さ約2 cmの炭層が6層確認された。竈に用いた薪の炭・灰を掻き出したものと考えられる。出土遺物はほとんどないが、16世紀前半代を中心とした時期と見て大過ない。なお、前庭部埋土を中心に人頭大の石が十数個確認された。竈本体に使用されていた石が廃絶後に投棄された可能性がある。

窯状遺構S F 7 (fig. 8) b27グリッドで検出した遺構である。南北約2.0 m、東西検出延長約2.3 m、深さ約0.4 mの土坑状を呈しており、東部は調査区外に広がる。本体床面のうち西側約1.0 mの半円形部分には黄褐色の粘土が貼られ、固く締まっている。底の一部は被熱によって赤変している。南部は廃絶後のピットによって2ヶ所破壊されている。東側は床面の粘土が剥ぎ取られたようで、一部粘土が検出面付近で確認されたのみである。これらのことから、土器焼成窯を含めた何らかの生産に関わる窯の可能性もある。遺構埋土からは、土師器皿や鍋など16世紀前半代のものが出土している。

また、S F 7の周囲に南北約3.5 m、東西検出延長約2.5 m、深さ約0.9 mの土坑を検出した。検出時は、S F 7の周囲を一回り大きくしたような土坑であったため、掘形と考えられた。埋土からは、15世紀後葉から16世紀前葉の土師器皿や鍋、陶器・磁器、瓦質土器などが大量に出土しており、掘形としては不自然な点もあり、別の遺構の可能性もある。また、その底部で直径約1.5 mの窪みやピット3基が検出され、ピットのうち1基には直径約20 cmの平石が1個、もう1基には拳大の石が3個確認されている。これらは全て土坑埋土に切られており、土坑掘削以前の遺構と考えられる。

3) その他の遺構

落ち込みS Z 11 b34グリッド以南で検出した遺構である。遺跡の立地する段丘の南端部にあたると思われる部分であり、南東方向に向かって漸次下降するものと考えられる。検出面から最深約1.1 mまで確認したが、危険を伴うためこれ以上の掘削は断念した。遺構上部は黒色系土の埋土であり、その下に約20 cmほどの炭層がある。この層を中心に土師器皿が多量に投棄されていた。中には逆さに10枚重ねられた土師器皿や二又になった鏝状の鉄製品などがある。土師器皿の形態から、16世紀前葉頃を中心に漸次土

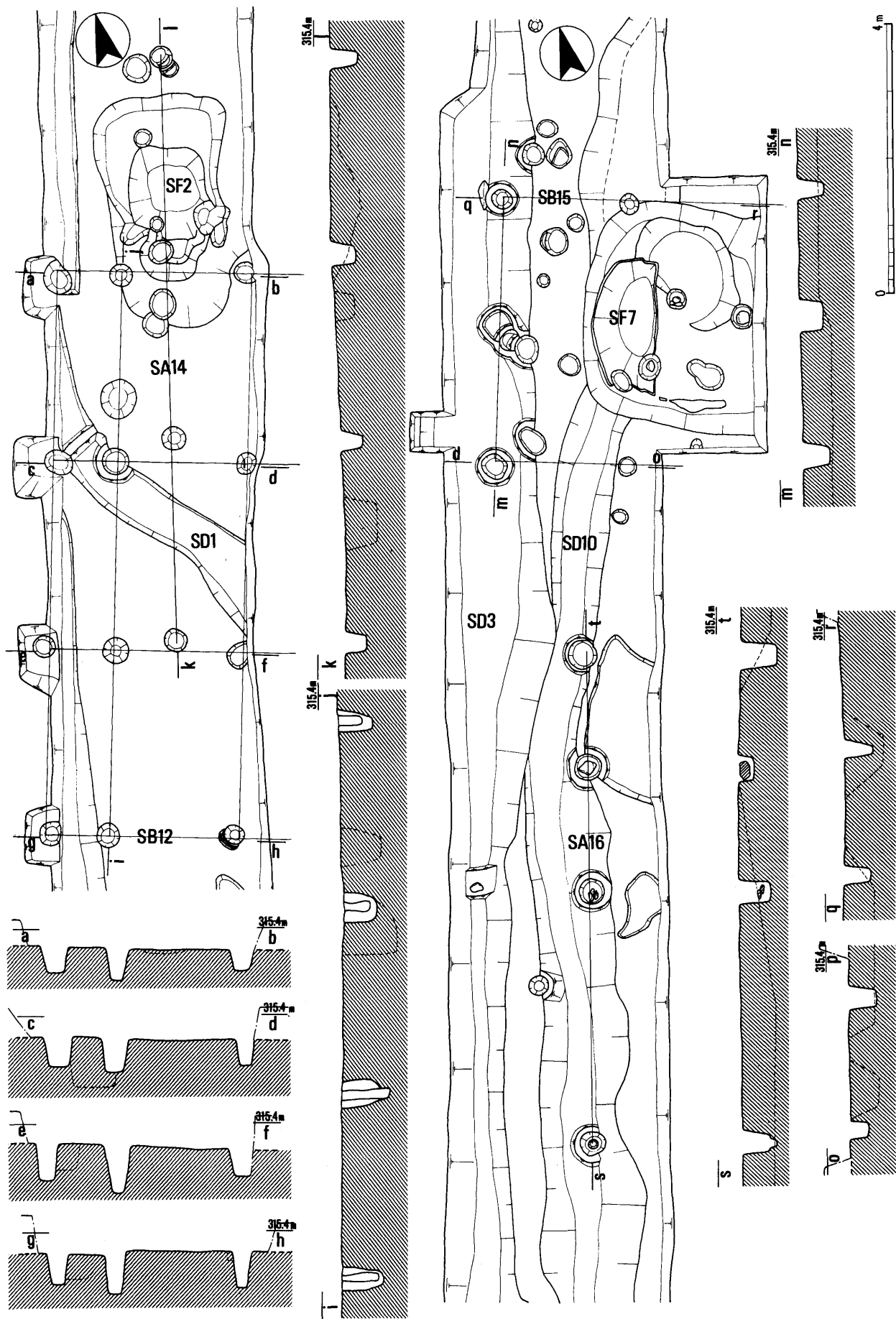


fig.6 SB12·15、SA14·16平面图·断面图 (1 : 80)

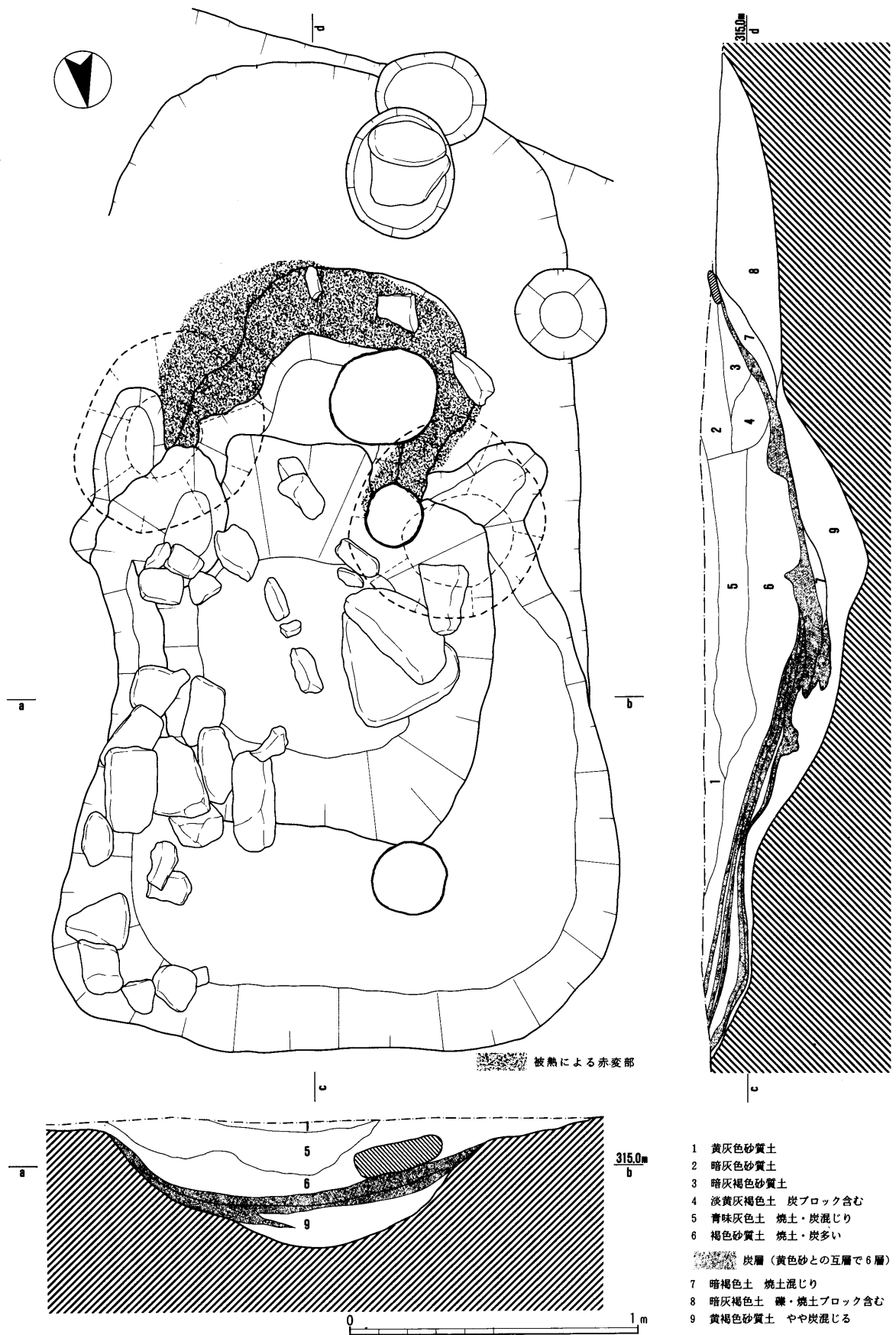
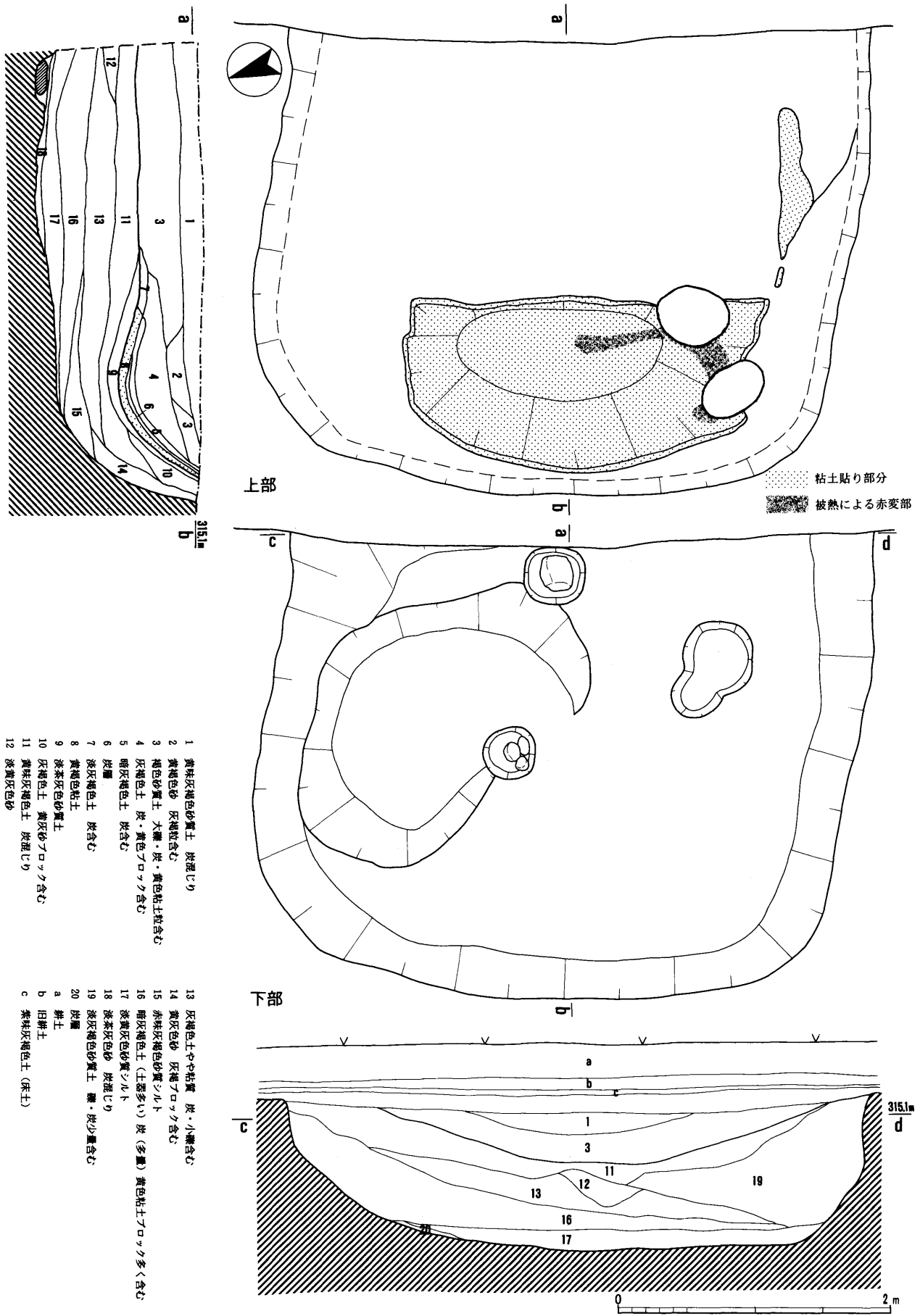


fig.7 SF2平面・断面図 (1:20)



- 1 黄緑灰褐色砂質土 炭塵じり
- 2 黄褐色砂 灰縄粒含む
- 3 褐色砂質土 大礫・炭・黄色粘土粒含む
- 4 灰褐色土 炭・黄色フロック含む
- 5 暗灰褐色土 炭含む
- 6 炭層
- 7 淡灰褐色土 炭含む
- 8 黄褐色粘土
- 9 淡茶灰色砂質土
- 10 灰褐色土 黄灰砂フロック含む
- 11 黄緑灰褐色土 炭塵じり
- 12 淡黄灰色砂
- 13 灰褐色土やや粘質 炭・小礫含む
- 14 黄灰色砂 灰縄フロック含む
- 15 赤味灰褐色砂質シルト
- 16 暗灰褐色土(土器多い) 炭(多量) 黄色粘土フロック多く含む
- 17 淡黄灰色砂質シルト
- 18 淡茶灰色砂 炭塵じり
- 19 淡灰褐色砂質土 礫・炭少量含む
- 20 炭層
- a 耕土
- b 旧耕土
- c 赤味灰褐色土(床土)

fig.8 SF7平面・断面図(1:40)

器等が投棄されたものと考えられる。

落ち込みSZ13 北調査区のb7、c7グリッドで検出した遺構である。石列を含む落ち込みである。埋土には焼土や炭なども含まれるが性格は不明である。出土遺物には土師器小皿や染付椀などがある。

石列SZ 17 (PL.5) 6、7グリッドで検出した遺構である。5列の企画性は不詳であるが、最も北に位置する石列が最下段に30～40cmの河原石を用い、3～4段に積み上げているのが確認された。この石列は南側に面を揃え、北側には掘形の痕跡も確認されているが、対応すると思われる石列は検出できなかった。また、北から3列目の石列の西部に五輪塔の火輪が使用されていることや、石列周辺埋土の出土遺物から見て、これらの石列は遡っても16世紀後半以降に造られたものであろう。

石列SZ 18 (PL.5) 4グリッドで検出した遺構である。この1対の石列は内側の面が揃っており、間隔は約1.2mである。西側丘陵部から八手俣川へ通じる道の可能性もある。

c7グリッドピット3 (fig.9) 北調査区の石列を除去中、薄い炭・焼土層下で検出したピットである。ピット埋土中には窯壁が充満しており、形状はロクロピット状である。ただし粘土貼り等が確認できず、別の機能を持つものの可能性もある。

石垣SZ 19 南調査区の南端で検出した遺構である。検出延長は南北約10m、東西約3m、高さ約1.1mである。埋土からは瓦、青磁椀、土師器皿などが出土しているが、蹄鉄、肥前椀、播鉢など近世以降の遺物も多く、近世から近代の石垣と思われる。
(越賀弘幸)

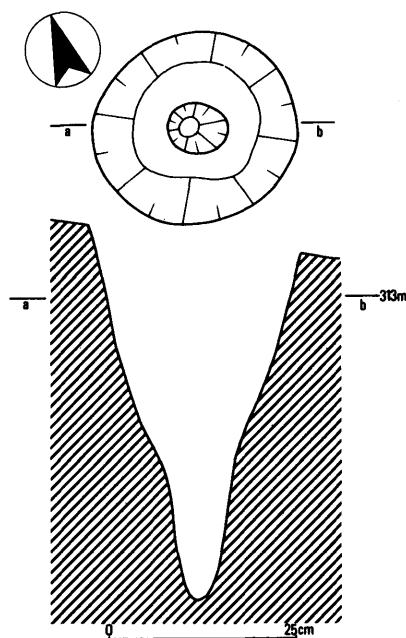


fig.9 c7グリッドpit 3平面・断面図(1:10)

IV 調査の成果 — 出土遺物 —

出土した遺物は、整理箱に換算して約61箱である。弥生時代から近世までのものがあるが、大部分が中世後期のものである。以下、出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細については出土遺物観察表 (tab.1～12) を参照されたい。

1 弥生時代の遺物 (fig.10)

230の甕のみである。口縁部は欠損するが、調整の特徴からは中期後葉頃のものと考えられる。

2 中世の遺物 (fig.10～16)

中世の遺物には、北畠氏入部以前のもの(1～43)と、それ以降のもの(44～56、62～229、231～320)がある。

a 北畠氏入部以前の遺物

12世紀後葉から13世紀前葉にかけてのものがある。土師器類では小皿・皿・甕(鍋)、瓦器では小皿・椀、陶器類では、小皿・椀、磁器類では椀がある。土師器類には回転台を用いて成形した、いわゆるロクロ土師器も含まれる。瓦器類は、いわゆる大和型から派生した伊賀型も含む。山田猛氏の編年^①によるⅡ段階3型式からⅢ段階1型式までのものが見られる。陶器類はいわゆる山茶椀で、知多・猿投産を主体に、一部渥美産のものを含むようである。

これらの土器類のうち、椀・皿形態については、瓦器と山茶椀が同程度出土しており、いずれかが格段に多いというわけではなさそうである。

b 北畠氏入部以後の遺物

北畠氏入部以後の遺物には、一部15世紀前葉頃の鍋(232)が認められるものの、その圧倒的大部分が15世紀後葉から16世紀中葉にかけてのものである。

土師器類

南伊勢系土師器 土井沖地区の調査と同様、この調査区においても土師器類の圧倒的大部分が南伊勢系土師器である。小皿・皿・小椀・鍋・茶釜・茶釜蓋・十能などの器種が見られる。

皿類では、A～D系統^②のもの全てが認められる。特に、SF7堀形出土の土器中には、15世紀末ないしは16世紀初頭頃のA系統小皿が見られ、B系統皿類の小形化以降もA系統小皿が残存することが実際に確認できた。

手法の点では、D系統皿を中心に底部外面に見られる板状圧痕が注意される。玉城町・岩出遺跡群では、この圧痕は13世紀中葉頃から出現^③、15世紀前半までにかかなりの数が確認できる。多気に見られるこの類の成因も、原則的に同じ手法といえる。

また、B系統小皿の外面には、同心円状に指オサエ痕のめぐるものがある。内面にはそれに対応したようなものは見られず、極めて平滑である。型作りの可能性も無くはないが、成形後に内面のみを丁寧にナデている結果である可能性が高い。

c6整地土層出土とした47～53は、同一地点からまとまって出土したもので、一括性の極めて高い一群である。このうち、51～53の外面には黒斑が見られる。第V章でも触れるように、重ね焼きの痕跡である可能性が高い。

72・100～102・172・173の小椀は、これまでもいくつかの遺跡で確認されてはいるものの、多気では初めての確認例である。

なお、75には墨状の、74には炭化米状の、それぞれ付着物が内面にある。大きめとはいえ口径12cm程度の皿であり、使用方法が興味深い事例である。

中北伊勢系統の土器 79、あるいは199の皿は、南伊勢系土師器の範疇では把握できない。調整手法の共通性からは、中北伊勢系統の土器として把握されるものである。類例としては、津市・南所遺跡^④などに認められる。なお、中北伊勢系統の土器は、土井沖地区の調査でも確認されておらず、多気では

はじめての確認例と思われる。

京都系の土器類 80～82、103～106、200・201・250～252は、内外面に丁寧なヨコナデを施すものである。南伊勢系土師器の範疇では把握できず、いわゆる「京都系」のものと考えられる。京都ないしはその近郊からの搬入品の可能性が高い^⑤。出土した遺構を見ると、15世紀末から16世紀前葉頃のものと考えられることができる。伊賀地域での類例はいくつか見出すことができるが、伊勢におけるまとまった出土は、極めて珍しいといえる。

瓦質土器類 瓦質土器類には、火鉢類(94・95・278)、風炉類(279・280)、香炉類(219)がある。近江俊秀氏の分類^⑥によると、有窓鉢F類(95)、有脚小型浅鉢IV類(219)、深鉢I類(278)、有窓鉢B・D類(279・280)となろうか。94の鉢は、丁寧なミガキ調整を行うものである。

陶器類 産地では、瀬戸・常滑・信楽のものが認められる。播鉢・練鉢類では、瀬戸と常滑のものが優勢で、信楽のものは少ない。椀・皿類は、ほぼ瀬戸のもので占められている。

108は瀬戸産の仏餉具で、県内ではあまり出土例を見ないものである。286の練鉢は、内面に斜格子状のヘラ刻みが焼成前に施されている。

磁器類 青磁・白磁のほか、染付の椀・皿がある。出土量は少ない。209の椀の内面には「福」の字と思われる染付がある。

瓦類 雁振瓦(292)と平瓦(293・294)がある。出土量は少なく、西方丘陵部からの転落、若しくは紛れ込みと思われる。

金属製品類 銅製品と鉄製品がある。295は銅製品で外面には金箔が認められる。小片のため、全体の形態は判らない。298～304は、鉄鏃状の形態をなすが、関が不明瞭なことから、断定はしかなる。305や306についても、用途は不明である。鋳貨は、北宋銭を主体とし、明銭も認められる。

石製品類 五輪塔(277)や砥石(263)、硯(261・262)がある。277の五輪塔は火山岩製で、玄武岩の一種ではないかと思われる。硯は粘版岩系の良質な石材を用いている。

その他 その他のものとして、円形加工土器片(210・231)や犬形土製品(240)がある。犬形土製品

は、体部から頭・四脚部分をひねり出して連続成形し、そこへ耳を付加している。目は錐状工具による刺突、口は棒状工具を横に押圧して表現している。製作の手法や大きさなどが芸濃町・下川遺跡出土のもの^⑦と酷似している。

c 近世～近代の遺物 (fig.10・16)

土師器焙烙(59)、陶器播鉢(61)、磁器椀(57・

58)のほか、蹄鉄(321)がある。土師器焙烙は南伊勢系のもの、陶器播鉢は瀬戸産、磁器椀は肥前産のもので、18世紀頃のものと考えられる。蹄鉄は、調査区南端部から鉄滓とともに出土したものである。西方丘陵部には、戦前まで「福寿の鍛冶屋」と呼ばれる職人が住んでいたとい^⑧、その関連遺物の可能性がある。(伊藤裕偉)

註

- ① 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の検討」(『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会、1986年)
- ② 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1993年)
- ③ 伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1996年)
- ④ 伊藤裕偉・穂積裕昌・森川幸雄「大里地区内遺跡群」(『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊、三重県埋蔵文化財センター、1992年)
- ⑤ 鋤柄俊夫((財)大阪府文化財調査研究センター)に、遺物実見のうえ、御教示を得た。
- ⑥ 近江俊秀「大和における中世後期の在地系土器—瓦質土器をめぐる二・三の問題—」(『北野腰越遺跡』奈良県立橿原考古学研究所、1992年)
- ⑦ 倉田直純「下川遺跡」(『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1990年)
- ⑧ 地元での聞き取りによる。

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
1	土師器 小皿	a33	SD3	(口) 8.0 (高) 1.1	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙	3/5		8 - 6
2	土師器 小皿	a35	SD3	(口) 8.1 (高) 1.4	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒含む	良	浅黄橙	1/2		8 - 5
3	土師器 小皿	a35	SD3	—	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	少量		8 - 7
4	土師器 小皿	a36	SD3	(口) 8.4 (高) 2.0	外:ヨコナデ・ロクロナデ 内:ヨコナデ・ロクロナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	少量	ロクロ土師器	10 - 3
5	土師器 皿	b35	SD3	(口) 14.2 (高) 3.5	外:ヨコナデ・ロクロナデ 内:ヨコナデ	砂粒赤色小粒含む	良	浅黄橙	完存	ロクロ土師器	8 - 1
6	土師器 椀	b29	SD3	(口) 14.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	細砂粒含む	良	浅黄橙	1/12	ロクロ土師器	8 - 4
7	土師器 椀	a34	SD3	(高台) 7.0	外:ロクロナデ・貼付高台・ヨコナデ 内:ロクロナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	底部 2/5	ロクロ土師器	10 - 2
8	陶器 椀	a36	SD3	(口) 16.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ・自然釉	細砂粒含む	良	灰白	1/8	山茶椀 猿投?知多?産	9 - 1
9	陶器 椀	a35	SD3	(高台) 7.6	外:ロクロナデ・貼付高台・ヨコナデ 内:ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白	1/4	山茶椀 猿投?知多?産	9 - 3
10	陶器 椀	a36	SD3	(高台) 8.2	外:ロクロナデ・貼付高台・ヨコナデ 内:ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白	1/3	山茶椀 知多産	9 - 2
11	陶器 椀	a31	SD3	(高台) 8.2	外:ロクロナデ・貼付高台・ヨコナデ 内:ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白	底部 1/3	山茶椀 猿投?知多?産	9 - 4
12	磁器 椀	a36	SD3	(高) 5.6	外:ロクロケズリ・ケズリ出し高台 内:ロクロナデ	微砂粒含む	良	釉-灰白 器-灰白	少量	白磁	10 - 4
13	土師器 甕	b29	SD3	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	少量		10 - 5
14	土師器 甕	a33	SD3	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	細砂粒含む	良	灰白	少量		10 - 6
15	土師器 甕	a31	SD3	—	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ	やや粗 微砂粒	良	にぶい橙	少量		6 - 1
16	土師器 甕	a36	SD3	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	細砂粒含む	良	灰白 浅黄橙	少量		10 - 1
17	瓦器 椀	a35	SD3	(高台) 5.8	外:貼付高台・ヨコナデ 内:ナデ	密 微砂粒	良	灰白	1/4		7 - 1
18	瓦器 椀	a36	SD3	(口) 15.0	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ・沈線	微砂粒含む	良	灰	1/11		9 - 6
19	瓦器 椀	a36	SD3	(口) 14.0	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ・沈線	微砂粒含む	良	灰	少量		9 - 8
20	瓦器 椀	a35	SD3	(口) 14.4	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ・沈線	微砂粒含む	良	灰	1/8		9 - 5
21	瓦器 椀	a30	SD3	(口) 15.0	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	1/8		8 - 3
22	瓦器 椀	a36	SD3	(口) 14.0	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ・沈線	微砂粒含む	良	灰	少量		9 - 7
23	瓦器 椀	a35	SD3	(口) 15.4	外:ヨコナデ・ヘラミガキ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	微砂粒含む	不良	浅黄橙 灰	1/6		8 - 2

tab.1 出土遺物観察表(1)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
24	土師器 皿	b35	SZ11	—	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 微砂粒	良	淡黄橙	少量		6 - 5
25	土師器 小皿	a22	暗褐色土	(底) 4.0	外:ロクロナデ・糸切り痕 内:ナデ	やや粗 ~1mm小石含む細砂粒	良	浅黄橙	少量欠く	ロクロ土師器	5 - 8
26	瓦器 椀	b36	暗褐色土	(高台) 5.5	外:貼付高台・ヨコナデ 内:ナデ	密 微砂粒	良	暗灰	1/2		7 - 2
27	磁器 椀	b23	暗褐色土	(口) 16.0	外:ヨコナデ・ロクロケズリ 内:ナデ・ヨコナデ	やや粗 細砂粒	良	釉-灰白 器-灰白	少量	白磁	7 - 7
28	陶器 椀	b36	SZ11炭層	(口) 15.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗 微砂粒	良	灰白	1/10	山茶椀 知多産	6 - 2
29	陶器 椀	b35	SZ11	(口) 16.5	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗 微砂粒	良	灰白	1/8	山茶椀 知多産	6 - 3
30	陶器 椀	c3	暗褐色土	(底) 6.0	外:ロクロナデ・糸切り痕 内:ナデ	やや粗 細砂粒	良	灰白	少量	山茶椀 瀬戸産?	5 - 4
31	陶器 椀	a37	SZ11炭層下 トレンチ	(底) 7.4	外:ロクロナデ・貼付高台・ ヨコナデ 内:ナデ	やや粗 ~1mm小石含む細砂粒	良	灰白	1/4	山茶椀 知多?猿投?産	5 - 7
32	陶器 椀	b37	表土暗褐色土	(高台) 7.5	外:ロクロナデ・貼付高台・ ヨコナデ 内:ナデ	やや粗 ~2mm小石含む細砂粒	良	灰白	1/3	山茶椀 瀬美産	5 - 6
33	陶器 椀	b36	SZ11炭層下 灰褐色土	(底) 6.8	外:ロクロナデ・貼付高台 内:ナデ	やや粗 細砂粒	良	灰白	少量欠く	山茶椀 猿投?知多?産	5 - 5
34	陶器 椀	b23	暗褐色土	(底) 7.5	外:ロクロナデ・貼付高台・ ヨコナデ 内:ナデ	やや粗 細砂粒	良	灰白	1/4	山茶椀 知多?猿投?産	5 - 2
35	陶器 椀	D25	暗褐色土砂質	(底) 10.5	外:ロクロナデ・貼付高台・ ヨコナデ 内:ナデ・自然釉	やや粗 細砂粒	良	灰白	1/2	山茶椀 知多?瀬美?産	5 - 1
36	陶器 椀	b22	暗褐色土	(底) 7.1	外:貼付高台・ヨコナデ 内:ナデ	やや粗 細砂粒	良	灰白	1/4	山茶椀 知多産?	5 - 3
37	陶器 壺	b36	SZ11炭層	(口) 14.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密 ~3mm小石含む細砂粒	良	灰白	1/4	常滑産?	6 - 7
38	土師器 甕	b36	暗褐色土	(口) 13.2	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 細砂粒	良	浅黄橙	少量		7 - 6
39	土師器 鍋	a37	SZ11炭層下 トレンチ	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗 ~1mm小石含む細砂粒	良	にぶい橙	少量		6 - 6
40	土師器 甕	b36	SZ11炭層	(口) 23.2	外:オサエ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	細砂粒少し含む	良	にぶい黄橙	1/4	内外面にスス附着	20 - 2
41	土師器 甕	a23	SD1	(口) 18.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 微砂粒	良	にぶい橙	1/8		6 - 8
42	土師器 甕	b32	SD10	(口) 23.8	外:ヨコナデハケメ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 細砂粒	良	浅黄	少量		7 - 4
44	磁器 椀	c7	SZ13	(底) 5.4	外:削り出し高台・ロクロケズリ 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	釉-明緑灰 器-浅黄橙	底部完存	明代染付椀	36 - 5
45	土師器 小皿	c7	SZ13	(口) 6.4 (高) 1.4	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	灰白	完存	内面底部に爪痕?	36 - 6
46	陶器 檜鉢	b24	PIT1	(口) 31.0	口縁・外:回転ナデ 内:回転ナデのち播目	粗 0.5~5.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁1/5	信楽産	2 - 1
47	土師器 小皿	c6	整地土(-100)	(口) 6.6 (高) 1.5	外:オサエ 内:ナデ	細砂粒少し含む	良	外-暗灰黄 内-にぶい黄橙	ほぼ完存	13g (47~53は一括状態で出土)	27 - 3
48	土師器 皿	c6	整地土(-100)	(口) 9.0 (高) 1.5	外:オサエ 内:ナデ後ヨコナデ	細砂粒少し含む	良	浅黄	2/3	C系	27 - 1
49	土師器 皿	c6	整地土(-100)	(口) 9.0 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ後ヨコナデ	砂粒ほとんど含まない	良	浅黄	3/4	D系	27 - 4
50	土師器 皿	c6	整地土(-100)	(口) 9.0 (高) 1.4	外:オサエ・ヨコナデ 内:ナデ後ヨコナデ	砂粒ほとんど含まない	良	淡黄	2/3	C系	27 - 6
51	土師器 皿	c6	整地土(-100)	(口) 9.0 (高) 1.5	外:オサエ 内:ナデ後ヨコナデ	細砂粒少し含む	良	にぶい黄橙	ほぼ完存	外面に黒斑、重ね焼き痕 D系	27 - 2
52	土師器 皿	c6	整地土(-100)	(口) 9.5 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ後ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	浅黄	3/4	外面に黒斑、重ね焼き痕 C系	27 - 5
53	土師器 皿	c6	整地土(-100)	(口) 9.0 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ後ヨコナデ	砂粒ほとんど含まない	良	灰黄	3/4	外面に黒斑、重ね焼き痕 C系	27 - 7
54	土師器 皿	b42	石垣東埋土	(口) 7.5 (高) 1.7	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	内面に工具あたり痕、外面底部に板状圧痕	38 - 3
55	磁器 椀	b41	石垣北埋土	(高台) 5.2	外:ロクロナデ・ロクロケズリ 内:ロクロナデ	微砂粒わずかに含む	良	釉-浅黄 器-灰白	1/4	青磁 同安窯系	37 - 3
56	磁器 椀	b42	石垣東埋土	(高台) 5.4	外:ロクロケズリ・底部軸かき取り 内:全体施釉	砂粒含まず	良	釉-オリブ灰 器-灰白	1/2	青磁 竜泉窯系?	37 - 4
57	磁器 椀	b41	石垣北埋土	(口) 12.0 (高) 6.5	外:全体施釉 内:全体施釉	砂粒含まず	良	釉-明緑灰・灰 器-灰白	口1/2高台完存	肥前産 高台下部に砂粒痕	38 - 1
58	磁器 椀	b40~41	石垣北埋土	(高台) 4.8	外:全体施釉・削り出し高台? 内:全体施釉	砂粒含まず	良	釉-明緑灰 器-灰白	3/8	肥前産	38 - 2
59	土師器 焙烙	b41	石垣北埋土	(口) 38.2	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	良	にぶい赤灰	1/13	近世、内外面スス附着	37 - 2
60	陶器 甕	b40	石垣北埋土	(口) 22.4	外:ヨコナデ・自然釉 内:ヨコナデ・自然釉	密 0.8~5.0mmの小石	堅緻	釉-暗褐色 器-暗灰	口縁1/5	常滑産	3 - 1
61	陶器 檜鉢	b41	石垣北埋土	(底) 13.6	外:ロクロナデ 内:播目・ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	暗褐・淡黄	1/3	瀬戸産(近世)、内面底部磨滅激しい	37 - 1
62	土師器 小皿	b27拵	SF7掘形	(口) 6.6 (高) 0.5	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒多く含む	良	浅黄橙	完存	A系 14g	44 - 3
63	土師器 小皿	b27拵	SF7掘形南	(口) 7.1 (高) 0.65	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	1/2	A系	48 - 2
64	土師器 小皿	b27拵	SF7掘形南	(口) 6.2 (高) 1.35	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	2/3	口縁内部に油煙痕 B系	47 - 4

tab.2 出土遺物観察表(2)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
65	土師器 小皿	b27	SF7掘形南	(口) 6.7 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・オサエ	微砂粒含む	良	淡橙	完存	B系 15g	46 - 2
66	土師器 小皿	b27	SF7掘形北西	(口) 6.8 (高) 1.2	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	2/3	口縁内部に油煙痕 B系	47 - 3
67	土師器 小皿	b27	SF7掘形北西	(口) 6.7 (高) 1.6	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	少量欠 く	B系 14g (推定)	46 - 4
68	土師器 小皿	b27	SF7掘形北西	(口) 6.9 (高) 1.6	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	少量欠 く	B系 15g (推定)	48 - 1
69	土師器 小皿	b27	SF7掘形	(口) 6.4 (高) 1.4	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙	ほぼ完 存	B系	40 - 1
70	土師器 皿	b27	SF7掘形南	(口) 6.7 (高) 1.85	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	橙	少量欠 く	外面スス付着、内面炭化物付 着 16g (推定)	46 - 6
71	土師器 皿	b27	SF7掘形北西	(口) 8.9 (高) 1.4	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙	完存	C系 24g	46 - 3
72	土師器 小椀	b27	SF7掘形北西	(高台) 4.8	外:ナデ・貼付高台 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	1/4		43 - 4
73	土師器 皿	b27	SF7掘形北西	(口) 10.8 (高) 1.9	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙	1/2	D系	46 - 7
74	土師器 皿	b27	SF7掘形北西	(口) 12.1 (高) 2.2	外:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	3/5	内面に炭化物(米?) D系	46 - 8
75	土師器 皿	b27	SF7掘形南	(口) 12.4 (高) 2.5	外:ヨコナデ・ナデ・板状圧痕 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	1/2	外面スス付着、内面墨状の付 着物 D系	46 - 5
76	土師器 皿	b27	SF7掘形西南	(口) 13.2 (高) 2.4	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	やや 不良	にぶい橙	1/2	D系	43 - 2
77	土師器 皿	b27	SF7掘形西南	(口) 16.4	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	微砂粒少し含む	良	外-にぶい黄橙 内-灰白・黄灰	1/8	D系	43 - 6
78	土師器 皿	b27	SF7掘形北西	(口) 12.2 (高) 2.5	外:ヨコナデ・オサエ・底部板 状圧痕 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	少量欠 く	D系 47g (推定)	49 - 2
79	土師器 皿	b27	SF7掘形西南	(口) 10.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	良	灰白	1/7	中北勢系	44 - 4
80	土師器 小皿	b27	SF7掘形北西	(口) 9.0	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	微砂粒含む	良	灰白	口1/6	京都系	40 - 8
81	土師器 皿	b27	SF7掘形	(口) 12.0	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白	1/8	京都系	48 - 4
82	土師器 皿	b27	SF7掘形	(口) 13.8	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒含む	良	灰白・灰	1/8	京都系	48 - 5
83	磁器 皿	b27	SF7掘形	(口) 13.0		細砂粒含む	良	軸-灰白 器-灰白	1/10	白磁	48 - 6
84	陶器 椀	b27	SF7掘形北西	(口) 11.2	外:ロクロナデ・ロクロケズリ 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	軸-黒 器-にぶい赤褐	1/8	瀬戸産天目茶椀	43 - 8
85	陶器 椀	b27	SF7掘形	(口) 12.0 (高) 5.7	外:ロクロナデ・削り出し高 台・サビ軸 内:ロクロナデ	細砂粒少し含む	良	軸-にぶい赤褐 器-にぶい赤褐	1/2	瀬戸産天目茶椀	43 - 1
86	陶器 小皿	b27	SF7掘形北西	(口) 11.3	外:ロクロナデ・ロクロケズリ	微砂粒含む	良	灰白	1/5	瀬戸産 緑釉小皿	42 - 7
87	土師器 茶 釜?小型壺?	b27	SF7掘形	(口) 7.8	外:ナデ・ハケメ 内:ナデ	微砂粒少し含む	良	にぶい黄橙・ 灰褐	1/4		43 - 3
88	土師器 鍋	b27	SF7掘形北西	-	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	少量	外面スス付着	42 - 4
89	土師器 鍋	b27	SF7掘形南西	(口) 26.6	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒少し含む	良	にぶい黄橙	1/7	外面にスス付着	30 - 1
90	土師器 鍋	b27	SF7掘形北西	(口) 28.6	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ後ナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙	1/9		47 - 2
91	土師器 鍋	b27	SF7掘形	(口) 34.0	外:ヨコナデ・オサエ・ハケメ 内:ヨコナデ・板ナデ	微砂粒含む	良	褐灰	1/8	内外面スス付着	41 - 1
92	土師器 鍋	b27	SF7掘形西南	(口) 33.2	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ?	微砂粒含む	良	灰褐・浅黄橙	1/12	外面スス付着	42 - 2
93	土師器 鍋	b27	SF7掘形西南	(口) 36.8	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒少し含む	良	外-灰褐 内-明褐灰	1/20	外面スス付着	43 - 5
94	瓦質土器 火鉢?	b27	SF7掘形北西	(口) 30.0	外:ヨコナデ・ヘラミガキ 内:ヘラケズリ・ハケメ	細砂粒含む	良	暗灰	1/8		47 - 1
95	瓦質土器 火舎	b27	SF7掘形西南	(体) 27.0	外:ミガキ・突帯貼付・ナデ・ 穿孔 内:ナデ・オサエ	微砂粒少し含む	良	外-暗灰 内-灰	体部1/8	穿孔径1.8cm	44 - 2
96	土師器 小皿	b27	SF7東 北区	(口) 5.9 (高) 0.5	外:オサエ後ナデ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	口1/2	A系	40 - 2
97	土師器 小皿	b27	SF7東 北区	(口) 6.8 (高) 1.1	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	口縁内部に油煙痕 11g	46 - 1
98	土師器 皿	b27	SF7東 北区	(口) 9.0 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	1/2	C系	40 - 3
99	土師器 皿	b27	SF7東 北区	(口) 11.1 (高) 2.2	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	D系	48 - 3
100	土師器 小椀	b27	SF7東 北区	(口) 7.3	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ・ハケメ?	微砂粒含む	良	にぶい橙	口1/4		40 - 5
101	土師器 小椀?	b27	SF7東 北区	(口) 8.0	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	1/4	外面にスス付着	40 - 4
102	土師器 小椀	b27	SF7東 北区	(口) 10.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	口1/4		40 - 6
103	土師器 皿	b27	SF7掘形西南	(口) 9.0	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ	微砂粒含む	良	灰白	少量	京都系	41 - 8
104	土師器 皿	b27	SF7東 北区	(口) 14.0	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ	微砂粒含む	良	灰白	口1/6	京都系	40 - 7

tab. 3 出土遺物観察表(3)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
105	土師器 皿	b27 抃	SF7東 北区	(口) 13.9	外: ヨコナデ・ナデ 内: ヨコナデ	微砂粒含む	良	灰白	1/8	京都系	41 - 3
106	土師器 皿	b27	SF7北西	(口) 16.2	外: ナデ・オサエ 内: ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	淡黄	1/8	内外面とも底部に黒斑あり	43 - 7
107	陶器 深皿	b27 抃	SF7東 南区	-	内: ロクロナデ	微砂粒含む	良	釉-オリーブ黄器-灰白	少量	瀬戸産折縁深皿 古瀬戸後期	42 - 8
108	陶器 仏師具	b27 抃	SF7東 南区	(底) 6.2	外: 糸切り痕・施釉(鬼板)	微砂粒含む	良	釉-暗赤灰器-淡黄	高台完	瀬戸産	41 - 5
109	陶器 小皿	b22	SF7東 南区	(口) 11.6 (高) 2.1	外: ロクロナデ・削り出し高台・ロクロケズリ	微砂粒含む	良	釉-オリーブ黄器-灰白	1/8	瀬戸産緑釉小皿、トナン痕3個	42 - 6
110	陶器 皿	b27	SF7東 南区	(高台) 7.6	外: 削り出し高台・ヨコナデ・回転ヘラ切り	微砂粒含む	良	オリーブ黄・灰白	高台3/5	瀬戸産、外面底部重ね焼き痕、内面底部に印花文	42 - 5
111	陶器 皿	b27 抃	SF7東 北区	(底) 6.6	外: 貼付高台・ヨコナデ・ケズリ	微砂粒含む	良	浅黄	高台3/5	瀬戸産端反小皿	41 - 7
112	陶器 小皿	b27 抃	SF7東 北区	(口) 11.8 (高) 2.7	外: 貼付高台・ヨコナデ・ヘラ切り 内: ロクロナデ	細砂粒含む	良	釉-浅黄器-灰白	4/5	瀬戸産端反皿 外面底部重ね焼き痕	49 - 1
113	陶器 椀	b27 抃	SF7東 北区	(口) 11.4	外: ケズリ・サビ釉	微砂粒含む	良	赤黒・灰赤	口1/4	瀬戸産天目茶椀	42 - 3
114	土師器 茶釜	b27 抃	SF7東 南区 灰褐色土	(口) 13.2	外: ナデ 内: ナデ	微砂粒少し含む	良	にぶい橙	1/20	外面スス付着 内面黒斑	43 - 9
115	土師器 鍋	b27 抃	SF7東 北区	(口) 30.4	外: ヨコナデ・オサエ後ハケメ 内: ヨコナデ・板ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	類1/6	外面スス付着	41 - 2
116	土師器 鍋	b27 抃	SF7東 南区	(口) 26.4	外: ヨコナデ・ハケメ 内: ヨコナデ・板ナデ	微砂粒含む	良	淡黄	1/6	外面スス付着	42 - 1
117	瓦質土器 火鉢?	b27 抃	SF7東 南区	(口) 26.7	外: ヨコナデ・ミガキ 内: ヨコナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙・褐灰	1/10		41 - 4
118	磁器 小皿	b27	SF7北	-	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	精良	良	釉-明緑灰器-灰白	少量	青磁	43 - 10
119	土師器 鍋	b27	SF7北	(口) 23.2	外: ヨコナデ・ナデ 内: ヨコナデ・ハケメ	微砂粒少し含む	良	外-褐灰・黒褐器-灰褐	1/4	外面スス付着	45 - 4
120	土師器 鍋	b27	SF7北西	(口) 26.0	外: ヨコナデ・ハケメ 内: ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	良	外-にぶい黄橙 内-灰褐	1/10		45 - 3
121	陶器 手付鍋?	b27	SF7北	(高台) 15.2	外: ロクロナデ・貼付ナデ・ロクロケズリ 内: ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	釉-灰褐器-灰白	1/8	瀬戸産 古瀬戸後期	45 - 1
122	陶器 播鉢	b27	SF7埋土	(口) 36.0	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ・播目	小石多く含む	良	外-にぶい橙 内-灰黄褐	少量	信楽産 口径不確定	44 - 1
123	陶器 練鉢	b27	SF7埋土	(口) 28.4	外: ロクロナデ・オサエ 内: ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	褐灰・赤灰	1/10	常滑産	45 - 2
124	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.10	(口) 6.4 (高) 1.3	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 12g	15 - 2
125	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.9	(口) 6.4 (高) 1.2	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	9/10	底のオサエは同心円状	15 - 1
126	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.8	(口) 6.4 (高) 1.2	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	4/5	底のオサエは同心円状	14 - 8
127	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.7	(口) 6.6 (高) 1.3	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 13g (推定)	14 - 7
128	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.6	(口) 6.4 (高) 1.2	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	ほぼ完存	底のオサエは同心円状	14 - 6
129	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.5	(口) 6.4 (高) 1.1	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	ほぼ完形	底のオサエは同心円状	14 - 5
130	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.4	(口) 6.4 (高) 1.3	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	ほぼ完形	底のオサエは同心円状 12g (推定)	14 - 1
131	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.3	(口) 6.4 (高) 1.2	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 12g	14 - 2
132	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.2	(口) 6.4 (高) 1.3	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	底のオサエは同心円状	14 - 3
133	土師器 小皿		SZ11 土師器 皿群No.1	(口) 6.1 (高) 1.2	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	5/6	底のオサエは同心円状 14g	14 - 4
134	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 5.5 (高) 0.6	外: オサエ 内: ナデ	やや密 1.0mm以下の砂粒含む	良	浅黄橙	完存	8g	25 - 8
135	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.1 (高) 1.7	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	灰白	3/4	歪み大きい	17 - 8
136	土師器 小皿	b36	SZ11炭層	(口) 7.2 (高) 1.7	外: オサエ 内: ナデ・工具痕	やや密 1.0mm以下の砂粒含む	良	浅黄橙	4/5	底面に指関節痕あり	24 - 5
137	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.3 (高) 1.3	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	4/5		16 - 1
138	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.8 (高) 1.3	外: オサエ 内: ナデ	やや密 1.0mm以下の砂粒含む	良	にぶい黄橙 淡黄	完存	端部に油煙痕(幅1cm)接合痕 15g	11 - 3
139	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.5 (高) 1.4	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	4/5	底のオサエは同心円状	11 - 5
140	土師器 小皿	b36	SZ11炭層	(口) 6.4 (高) 1.4	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	にぶい橙	完存	底のオサエは同心円状 15g (推定)	24 - 8
141	土師器 小皿	b36	SZ11炭層	(口) 7.2 (高) 1.4	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	にぶい橙 橙	2/3		24 - 4
142	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.5	外: オサエ 内: ナデ・工具痕	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 14g	12 - 6
143	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.4 (高) 1.4	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	灰白	2/3	外面底部に指オサエ痕、同心円状オサエ	17 - 9
144	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.8 (高) 1.4	外: オサエ 内: ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	15g	15 - 6

tab. 4 出土遺物観察表(4)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
145	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.8 (高) 1.4	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	12g	11 - 4
146	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.3 (高) 1.4	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 11g	15 - 5
147	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.6	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 14g	12 - 4
148	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.4 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ・工具痕	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	12g 内面のナデは口縁部内 面を回る感じ	11 - 6
149	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.9 (高) 1.2	外:オサエ 内:ナデ・工具痕	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 12g	12 - 5
150	土師器 小皿	b36	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.6	外:オサエ 内:ナデ・工具痕	密 微砂粒含む	良	灰白 浅黄橙	少量欠 く	12g (推定)	12 - 8
151	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.3 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 12g	15 - 7
152	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.5 (高) 1.5	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	9/10	底のオサエは同心円状	15 - 3
153	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.6 (高) 1.55	外:オサエ 内:板状ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	外面底部剥離	11 - 2
154	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.3 (高) 1.2	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	12g	15 - 8
155	土師器 小皿	b36	SZ11炭層	(口) 6.5 (高) 1.5	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	4/5		26 - 2
156	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.6 (高) 1.6	外:オサエ 内:ナデ・工具痕	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状	11 - 8
157	土師器 小皿	b36	SZ11炭層	(口) 6.6 (高) 1.35	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	にぶい橙	完存	13g	24 - 7
158	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.5 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	9/10		16 - 3
159	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.45	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 14g	12 - 1
160	土師器 小皿	b36	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.4	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	にぶい橙	少量欠 く	底のオサエは同心円状 15g (推定)	24 - 6
161	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.8 (高) 1.5	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	少量欠 く	底のオサエは同心円状 14g	12 - 2
162	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.45	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	15g	12 - 3
163	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.8 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ	やや密 1.0mm以 下の砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 14g	26 - 1
164	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 7.0 (高) 1.5	外:オサエ 内:ナデ一部工具ナデ	密 1mm大の小石 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	16g	16 - 2
165	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.4	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	にぶい黄橙	完存	14g 接合痕	11 - 1
166	土師器 小皿	b35	SZ11	(口) 7.4 (高) 1.65	外:オサエ 内:ナデ	やや密 1.5mm以 下の砂粒含む	良	橙	4/5	内面に油煙痕	26 - 5
167	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.6 (高) 1.55	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙、黄灰	完存	底のオサエは同心円状 14g	12 - 7
168	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.8 (高) 1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	灰白	3/4		17 - 10
169	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.4 (高) 1.35	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	外-灰黄・褐灰 内-明赤褐	少量欠 く	内面のナデは、はき出し状に 放射 12g(推定)	11 - 7
170	土師器 小皿	b37	SZ11炭層	(口) 6.7 (高) 1.3	外:オサエ 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	ほぼ完 存	底のオサエは同心円状 13g (推定)	15 - 4
171	土師器 小皿	b39	炭層下礫層	(口) 7.2 (高) 0.9	外:オサエ・ナデ 内:ヨコナデ	密 0.8~1.0mm の小石	良	茶灰	1/4	大和系? いわゆるへそ皿	3 - 3
172	土師器 小碗	b37	SZ11炭層	(高台) 5.3	外:ナデ・貼付高台 内:ハケメ	微砂粒少し含む	良	灰白	底部ほ ぼ完存		20 - 4
173	土師器 小碗	b36	SZ11炭層	(高台) 5.0	外:オサエ・ナデ・貼付高台 内:ナデ	微砂粒少し含む	良	浅黄橙	底部ほ ぼ完存		20 - 5
174	土師器 皿	b38	SZ11炭層	(口) 8.8 (高) 1.4	外:オサエ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 2.0mm以 下の砂粒含む	良	灰白 浅黄橙	完存	C系 22g	13 - 1
175	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 9.7 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	灰白	3/4	底面には指オサエ痕残る C 系	17 - 7
176	土師器 皿	b39	SZ11炭層下 礫層	(口) 9.3 (高) 1.7	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密 1.0mm以 下の砂粒含む	良	浅黄橙	少量欠 く	C系 口縁部に油煙痕	25 - 5
177	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 9.0 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	密 1.0mm以下の 砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底のオサエは同心円状 C系 22g	25 - 7
178	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 8.6 (高) 1.2	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・工具ナデ	密 ~2mm大の小 石微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底面のオサエには指関節痕も 残る C系 19g	16 - 4
179	土師器 皿	b37	SZ11炭層上	(口) 8.8 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 1.5mm以 下の砂粒含む	良	淡黄	完存	口縁部4ヶ所、底部に油煙痕 D気味C系	25 - 4
180	土師器 皿	b36	SZ11炭層	(口) 9.0 (高) 1.5	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密 1.0mm以 下の砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	粘土接合痕 C系	25 - 2
181	土師器 皿	b36	SZ11炭層	(口) 8.6 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密 (1.5mm以 下の砂粒含む)	良	浅黄橙	完存	C系 24g	24 - 3
182	土師器 皿	b39	SZ11炭層下 礫層	(口) 9.2 (高) 1.35	外:オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 1.5mm以 下の砂粒含む	良	にぶい橙 浅黄橙	完存	口縁部に油煙 C系 22g	25 - 6
183	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 8.9 (高) 1.2	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	灰白	1/2	底面には指オサエ痕残る C系	17 - 5
184	土師器 皿	b38	SZ11炭層	(口) 9.0 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 1.5mm以 下の砂粒含む	良	浅黄橙	完存	C系 23g	25 - 3

tab. 5 出土遺物観察表 (5)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
185	土師器 皿	b36	SZ11炭層	(口) 8.9 (高) 1.45	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	良	浅黄橙	2/3	底面に指関節痕あり D系	24 - 2
186	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 8.8 (高) 1.4	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	C系 20g	16 - 7
187	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 9.0 (高) 1.4	外:オサエ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密 1.5mm以下の砂粒含む	良	浅黄橙	ほぼ完存	C系 22g (推定)	13 - 3
188	土師器 皿	b36	SZ11炭層	(口) 9.1 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密 1.0mm以下の砂粒含む	良	浅黄橙	7/8	C系	25 - 1
189	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 9.1 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	完存	底面のオサエには指関節痕も残る D系 22g	16 - 6
190	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 8.9 (高) 1.4	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	口縁完存		17 - 2
191	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 8.9 (高) 1.3	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	灰白	3/4	底面には顕著な指オサエ痕残る C系	17 - 6
192	土師器 皿	b36	SZ11炭層	(口) 8.8 (高) 1.6	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	良	にぶい橙	完存	D系 24g	24 - 1
193	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 8.8 (高) 1.5	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	9/10	底面のオサエには指関節痕も残る D系	16 - 5
194	土師器 皿	b38	SZ11炭層	(口) 8.6 (高) 1.85	外:オサエ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密 1.0mm以下の砂粒含む	良	にぶい橙	完存	D系 27g	13 - 2
195	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 11.1 (高) 2.0	外:オサエ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	やや密 1.5mm以下の砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	大きく歪む	13 - 4
196	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 11.1 (高) 2.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	少量欠く	35g (推定)	26 - 4
197	土師器 皿	b37	SZ11炭層	(口) 11.6 (高) 2.1	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	密 1.0mm以下の砂粒含む	良	浅黄橙	完存	32g	26 - 6
198	土師器 皿	b38	SZ11炭層下 礫層	(口) 12.4 (高) 2.3	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙	1/3	D系	26 - 3
199	土師器 皿	b37	SZ11炭層・ 炭層上	(口) 9.7 (高) 2.0	外:オサエ・ナデ・指オサエ痕 内:ナデ	密 微砂粒含む	良	灰白	7/8	中・北勢系	17 - 1
200	土師器 皿	b39	炭層下礫層	(口) 13.3 (高) 2.3	外:ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	密 0.5~1.0mmの 小石	良好	淡茶灰	1/10	京都系 法量は推定	3 - 4
201	土師器 皿	b38	排土	(口) 14.0	外:ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	細砂粒少し含む	良	灰白	1/4		20 - 6
202	土師器 皿	b38	SZ11炭層、 炭層下	(口) 16.2 (高台) 4.4	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗 微砂粒	良	淡黄	少量	口径推定	6 - 4
203	陶器 椀	b37			外:ロクロナデ・ロクロヘラケ ズリ 内:ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	軸-にぶい赤褐色- 灰赤	1/4	瀬戸産天目茶椀	17 - 3
204	陶器 椀	b37	SZ11	(口) 8.0 (高) 3.8	外:ロクロナデ・ヘラケズリ 内:ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	軸-褐色 器-浅黄橙	口1/4 台2/3	瀬戸産天目茶椀	17 - 4
205	磁器 椀	b37	SZ11炭層	-	外:ナデ・蓮弁文 内:ナデ	密 微細粒含む	良	明緑灰	少量	青磁 竜泉窯系	19 - 2-4
206	磁器 椀	b37	SZ11炭層	(口) 10.6	外:ロクロナデ・施軸・蓮弁文 内:ロクロナデ・施軸	密 微砂粒含む	良	軸-オリーブ灰 器-灰白	1/10	青磁 竜泉窯系	13 - 5
207	磁器 椀	b39	礫層	(口) 12.8	外:3条のハケメ	密	聖燬	軸-淡緑 器-淡灰	口縁 1/10	青磁	3 - 5
208	磁器 皿	b37	SZ11炭層上	(高台) 6.2	外:ロクロナデ・ロクロケズリ 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白	1/8	明代 染付皿	22 - 1-3
209	磁器 椀	b36	SZ11炭層	(高台) 4.6	外:ケズリ出し高台・ロクロケ ズリ 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白	1/2	明代 染付椀 内面底部に文字「福」	22 - 1-2
210	陶器 (円形加工品)	b37	SZ11炭層	(高) 1.0	打ち欠きによる剥離痕・ナデ・ 施軸、研磨ナシ	密 微細粒含む	良	軸-オリーブ灰 器-灰白	-	瀬戸産陶器片を転用 53.2g	19 - 2-2
211	土師器 茶釜蓋	b36	SZ11炭層	(口) 16.0 (高) 1.85	外:ヨコナデ・ナデ・つまみ 内:ヨコナデ・ナデ・オサエ	微砂粒少し含む	良	浅黄橙	1/4強	内面(つまみの裏側)にスス 付着	22 - 1-4
212	土師器 茶釜	b37	SZ11炭層	(口) 13.8	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・板ナデ	微砂粒少し含む	良	灰白	5/8	外面にスス付着	20 - 1
213	土師器 茶釜	b38	SZ11炭層	(口) 14.9	外:ハケメ 口縁:ヨコナデ 内:オサエのちナデ	密 0.5~1.0mmの 小石	良	淡茶灰、断面 黒灰	頸部1/5	焼成後穿孔(2個1対?) スス付着 有耳	2 - 2
214	土師器 鍋	b37	SZ11炭層	(口) 25.0	外:ヨコナデ・ハケメ薄く残る 内:ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	浅黄橙	1/11		20 - 3
215	土師器 鍋	b37	SZ11炭層	(口) 26.5	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	良	外-黒 内-浅黄橙	1/8	外面にスス付着	21 - 2
216	土師器 鍋	b36	SZ11	(口) 29.3	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	外-褐色 内-浅黄橙	少量		21 - 4
217	土師器 鍋	b36	SZ11暗褐色土	(口) 35.8	外:ヨコナデ・オサエ・ハケメ 内:ヨコナデ・板ナデ	微砂粒少し含む	良	外-黒 内-にぶい黄橙	1/11	外面にスス付着	21 - 1
218	土師器 鍋	b36	SZ11	(口) 35.0	外:ヨコナデ・ハケメ・ケズリ 内:ヨコナデ・板ナデ・ケズリ	微砂粒少し含む	やや 不良	外-にぶい橙 内-明褐色	3/8		23 - 1
219	瓦質土器 香炉?	b38	SZ11炭層上	(高) 5.6	外:ハケメ後ミガキ 内:ナデ・板ナデ	密 0.5~3.0mmの 小石	良好	暗灰~赤褐色	約1/4	小判形 三足 口縁部切り取り 底部に板敷痕	3 - 2
220	陶器 鉢	b36	SZ11	(口) 24.9	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	軸-オリーブ黄 器-灰白	1/9	瀬戸産	18 - 2
221	陶器 楕鉢	b38	SZ11炭層上	(口) 不明	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ・楕目	密 微砂粒含む	良	灰	少量	瀬戸産	18 - 4
222	陶器 鉢	b37	SZ11炭層上	(口) 25.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	赤灰	少量		22 - 1-1
223	陶器 楕鉢	b38	SZ11炭層上	(口) 30.6	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	褐色	1/8	瀬戸産	18 - 1
224	陶器 楕鉢	b36	SZ11炭層	(口) 37.5	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密 微細粒含む	良	軸-灰 器-にぶい橙	1/12	瀬戸産 片口あり 内面磨減	19 - 2-1

tab.6 出土遺物観察表(6)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
225	陶器 鉢	b37	SZ11	(口) 39.1	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密 微砂粒含む	良	釉-黒褐色 器-灰白	少量	瀬戸産 口径推定	18 - 3
226	陶器 鉢鉢	b37	SZ11炭層上	(口) 36.4	外:オサエ・ヨコナデ 内:ナデ	~3mmの砂粒少し含む	良	浅黄橙	1/8	常滑産 口縁部割れ 内面磨減	21 - 3
227	陶器 鉢	b37	SZ11炭層	(口) 39.2 (底) 14.0	外:削り出し高台?ヘラケズリ 内:ロクロナデ	密 微細粒含む	良	釉-灰褐色 器-浅黄橙	底1/4 口少量	瀬戸産 底部・口縁部は同一 個体か?口径推定	19 - 2
228	陶器 甕	b38	SZ11炭層	(口) 26.8	外:ナデ 内:ナデ	細砂粒やや多い(2mm 前後の小石含む)	良	にぶい橙 にぶい赤褐	1/12	常滑産 内面に接合痕あり	19 - 1
229	土師器 十能形	b36	SZ11炭層	-	外:オサエ後ナデ 内:ナデ	微砂粒少し含む	良	浅黄橙	-	十能形	22 - 2-1
230	弥生 甕	a36	SD3	(類) 13.0	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ	やや粗 1.5mm以下の 砂粒含む	良	にぶい黄橙・ 褐灰・灰黄褐	頸部 1/10		4 - 1
231	陶器 甕 (円形加工品)	b25	暗褐色土	(高) 1.0	打ち欠きによる剝離痕、研磨ナシ	やや粗 1.5mm以下の 砂粒含む	良	釉-灰褐色 器-にぶい橙	-	陶器甕の体部を転用	4 - 2
232	土師器 鍋	b35	SZ11炭層	-	外:ナデ 内:ナデ	密 微細粒含む	良	灰白	少量		19 - 2-3
233	磁器 椀	b26	暗褐色土	(口) 16.2	外:施釉 内:施釉	密 微砂粒	良	釉-オリーブ灰 器-灰白	少量	青磁	7 - 3
234	土師器 小皿	試掘坑No.2		(口) 6.8 (高) 1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密 0.5mm前後の小 石	良好	淡茶灰	3/4		1 - 4
235	土師器 皿	試掘坑No.2		(口) 9.0 (高) 1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密 0.5~1.0mmの小 石	良好	淡茶灰	完形		1 - 3
236	土師器 皿	試掘坑No.2		(口) 9.0 (高) 1.5	外:ヨコナデ・オサエ・板状圧 痕 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	良	にぶい橙	ほぼ完 存	板状圧痕はナデの前	27 - 8
237	陶器 皿	試掘坑No.2		(口) 11.4 (高) 2.8	外:削り出し高台	密 0.5~2.0mmの小 石	堅緻	釉-淡緑 器-淡茶灰	3/5	瀬戸産端反皿 外面底部にト チン跡	1 - 2
238	陶器 鉢鉢	試掘坑No.3		(口) 29.0	外:ヨコナデ・オサエ(掌痕) 内:ヨコナデ	砂粒多く含む	良	淡赤橙	1/4	常滑産 内面下部に使用による 磨減	31 - 1
239	陶器 鉢鉢	試掘坑No.2		(口) 38.0	外:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒多く含む	良	橙	1/10		28 - 3
240	大形土製品	c2	炭層上	全長約3.5 高さ約2.8	手びねり 目、口は刺突 耳、 尾は素地付加	密 0.5~2.0mmの小 石	良	淡橙	脚3本 欠損		1 - 1
241	土師器 小皿	c7	暗褐色土	(口) 6.2 (高) 1.4	外:指オサエ 内:ナデ	細砂粒含む	良	浅黄橙	ほぼ完 存	内面に油煙付着	30 - 4
242	土師器 小皿	c5	基盤上	(口) 6.9 (高) 1.75	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4		36 - 4
243	土師器 小皿	c3	基盤上	(口) 6.6 (高) 1.7	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4		35 - 8
244	土師器 小皿	c7	南石列南 (炭層)	(口) 6.4 (高) 1.4	外:オサエ 内:ナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙	完存	13g	35 - 9
245	土師器 皿	c5	基盤上	(口) 8.5 (高) 1.5	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒少し含む	良	淡橙・浅黄橙	3/4	D系	35 - 7
246	土師器 皿	c8	暗褐色土	(口) 8.5 (高) 1.5	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙 褐灰	ほぼ完 存	D系 19g(推定) 内面に炭 化物付着	35 - 6
247	土師器 皿	c6	石垣裏	(口) 11.2 (高) 2.2	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	3/4	D系	35 - 3
248	土師器 皿	c5	基盤上	(口) 11.9 (高) 2.1	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙	1/3	D系	34 - 5
249	土師器 小椀	c7	暗褐色土	(口) 8.6 (高) 3.1	外:ヨコナデ・オサエ・貼付高 台 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒少し含む	良	浅黄橙	1/6		33 - 3
250	土師器 小皿	c4	暗褐色土	(口) 10.0	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒多く含む	良	浅黄橙	1/4		33 - 2
251	土師器 皿	c7	暗褐色土	(口) 11.7	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒含む	良	浅黄橙	1/6		35 - 5
252	土師器 皿	c7	南石列南 (炭層)	(口) 12.0	外:ヨコナデ・板状圧痕 内:ヨコナデ	細砂粒含む	良	灰白	1/4		35 - 4
253	磁器 小椀	c7	灰褐色土	(口) 9.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	釉-緑灰 器-灰	3/8	青磁	33 - 5
254	磁器 皿	c7	暗褐色土	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	釉-明緑灰 器-灰白	少量	青磁 内面に陰刻あり	33 - 6
255	磁器 椀	c3~8	表採	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗 1.0mm以下の 砂粒含む	良	釉-オリーブ灰 器-灰白	少量	青磁	4 - 5
256	磁器 椀	c6	整地土	(高台) 5.5	外:ロクロケズリ 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	釉-緑灰 器-灰白	高台2/3	青磁 内面底部に陰刻	28 - 4
257	陶器 小皿	c2	炭層上	(口) 10.7 (高) 2.5	外:ロクロナデ・糸切り痕 内:ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	釉-オリーブ灰 器-灰白	3/10	瀬戸産緑釉小皿	32 - 4
258	陶器 皿	c5	基盤上	(口) 11.0 (高) 2.4	外:ロクロナデ・ロクロケズリ 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	釉-オリーブ黄 器-灰白	1/2	瀬戸産端反皿	36 - 2
259	陶器 皿	c3	基盤上	(底) 5.0	外:ロクロナデ・糸切り痕 内:ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	釉-黒 器-灰白	底部1/5	瀬戸産鉄釉皿	36 - 3
260	陶器 椀	c7	暗褐色土	(口) 11.5	外:ロクロナデ・ロクロケズリ 内:ロクロナデ	細砂粒含む	良	釉-黒褐色 器-にぶい橙	1/16	瀬戸産天目茶椀	30 - 5
264	土師器 茶釜蓋	c7	暗褐色土	(口) 15.1	外:オサエ 内:ヨコナデ	微砂粒多く含む	良	浅黄橙・褐灰	1/12	口縁部外面黒変 外面スス付 着	33 - 1
265	土師器 鍋	c3	整地土 (-150)	(口) 18.0	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	良	灰黄	1/14	両面にスス付着 内面に炭化 物付着	28 - 2
266	土師器 鍋?	c7	表土~暗褐 上	(口) 16.0	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白	1/7	外面にスス付着	34 - 4
267	土師器 鍋	c7	南石列南 (炭層)	(口) 21.8	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒含む	良	にぶい橙	1/6		34 - 3

tab.7 出土遺物観察表(7)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
268	土師器 茶釜	c6	炭層上	(口) 15.4	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・工具ナデ?	微砂粒多く含む	良	浅黄橙	1/5	内面に工具あたり痕?	30 - 2
269	土師器 十能形	北調査区	表探	-	外:ヨコナデ・ハケメ・ナデ 内:ナデ	砂粒ほとんど含まない	良	淡黄	取っ手 部完存	外面にスス付着	29 - 4
270	土師器 鍋	c5	基盤上	(口) 28.0	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ハケメ	密 1.0mm以下の砂粒含む	良	にぶい黄橙	1/8	外面にスス付着	4 - 4
271	土師器 鍋	c5	基盤上	(口) 31.2	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・板ナデ	細砂粒少し含む	良	灰白、灰褐	1/6	外面にスス付着	34 - 1
272	土師器 鍋	c7	南石列南(炭層)	(口) 31.2	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ・ハケメ後ケズリ	細砂粒含む	良	浅黄橙	1/4		34 - 2
273	土師器 鍋	c5	基盤上	(口) 33.4	外:ヨコナデ・ハケメ 内:ヨコナデ	密 微砂粒含む	良	浅黄橙 外面 黒褐	1/8	スス付着	4 - 3
274	陶器 壺		表探	(口) 15.0	外:ロクロナデ・貼付ナデ 内:ロクロナデ?	微砂粒少し含む	良	軸-暗褐 器-浅黄橙	1/8	瀬戸産口広有耳壺、古瀬戸後期	29 - 2-2
275	陶器 小鉢	c7	重機掘削	(口) 19.0 (高) 5.2	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	外-にぶい赤褐 内-淡黄	1/14	常滑産 自然釉付着	28 - 1
276	陶器 壺	c2	炭層上	(高台) 12.8	外:ロクロケズリ・削り出し高台 内:ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	軸-暗褐 器-淡黄	1/8	瀬戸産鉄釉壺	30 - 3
278	瓦質土器 ?	c5	基盤上	(口) 20.0	外:ナデ後ミガキ 内:ナデ	微砂粒含む	良	灰・灰白	1/7		35 - 2
279	瓦質土器 風炉	c5	整地土	(口) 28.0	外:ロクロナデ? 内:ロクロナデ?・ハケメ?	細砂粒少し含む	良	灰	1/4	透かしあり、いぶしのため調整不明瞭	29 - 2
280	瓦質土器 風炉	c6	整地土	(口) 25.6	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	細砂粒少し含む	良	暗赤褐 にぶい赤褐	1/10		29 - 1
281	陶器 楕鉢	c5	基盤上	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗 1.0mm以下の砂粒含む	良	軸-灰 器-にぶい橙	少量	瀬戸産	4 - 6
282	陶器 練鉢	北調査区	表探	(口) 31.0	外:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	細砂粒少し含む	良	橙	1/8	常滑産	29 - 2-1
283	陶器 楕鉢	c6	炭層上	(口) 26.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	細砂粒多く含む	良	軸-灰赤 器-灰白	1/18	瀬戸産	33 - 4
284	陶器 楕鉢	c5	基盤上	(口) 31.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	細砂粒少し含む	良	軸-暗赤灰 器-淡黄	少量	瀬戸産 鉄釉	36 - 1
285	陶器 練鉢	c7	暗褐色土	(口) 32.2	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	細砂粒多く含む	良	にぶい橙	1/8	常滑産	31 - 2
286	陶器 練鉢	c3	整地土 (-150)	(口) 28.2	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	細砂粒多く含む	良	赤橙	1/8	常滑産 内面に格子状の何かの絵?	29 - 3
287	陶器 練鉢	c2	炭層上	(口) 32.8	外:ヨコナデ・オサエ(掌痕) 内:ヨコナデ・板ナデ	砂粒多く含む	良	にぶい褐	1/10	常滑産	32 - 2
288	陶器 練鉢	c4	暗褐色土	(口) 37.0	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	細砂粒多く含む	良	にぶい橙 にぶい赤褐	1/12	常滑産 内面下部に使用による磨減	32 - 1
289	陶器 練鉢	c6	石垣裏	(口) 36.5	外:ヨコナデ・オサエ後ナデ(掌痕) 内:ヨコナデ	砂粒含む	良	にぶい橙 浅黄橙	1/12	常滑産	35 - 1
290	陶器 練鉢	c4	暗褐色土	(口) 41.0	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	細砂粒多く含む	良	橙	1/12	常滑産	31 - 3
291	陶器 練鉢	c2	炭層上	(底) 11.8	外:オサエ 内:ナデ	砂粒多く含む	良	にぶい褐	1/2	常滑産 内面底部に使用による磨減	32 - 3

tab. 8 出土遺物観察表(8)

No.	形態	地区	層位・遺構	調整・技法の特徴	胎土	焼成	備考	実測No.
292	雁板瓦	b42	石垣東埋土	凸:ミガキ 凹:布目 端面をケズリ	微砂粒含む	良		50 - 3
293	平瓦	b38	炭層上	凸:ハナレ砂 凹:ナデ 端面をケズリ	微砂粒含む	良		50 - 1
294	平瓦	b41	石垣北埋土	凸:ナデ・ハナレ砂少量 凹:ナデ 端面をケズリ後ナデ	微砂粒含む	良	いぶし有	50 - 2

tab. 9 出土瓦観察表

No.	名称	地区	遺構・層名	備考	実測No.
43	砥石	b29	SD10	泥岩製	7 - 5
261	硯	c8	灰褐土		28 - 6
262	硯	c7	灰褐土		28 - 5
263	砥石	c6	炭層上	泥岩製	33 - 7
277	五輪塔火輪	c6	石垣内	安山岩?	39 - 1

tab. 10 出土石製品観察表

No.	名称	地区	層位・遺構	質	備考	実測No.
295	不明	b23	PIT1	銅	金箔装	54 - 1
296	小刀	b27	SF7掘形西南	鉄		52 - 3
297	小刀	a35	SD3	鉄		52 - 2
298	鉄族?	b36	SZ11炭層	鉄		53 - 4
299	鉄族?	b27	SF7北 北区	鉄	(長) 8.4cm	53 - 2
300	鉄族?	b36	SZ11炭層	鉄	(長) 6.7cm	53 - 3
301	鉄族?	b37	SZ11炭層	鉄	(長) 8.7cm	53 - 7
302	鉄族?	b27北	SF7東 北区	鉄	(長) 7.7cm	53 - 1
303	鉄族?	b37	SZ11炭層	鉄		53 - 6
304	鉄族?	b36	SZ11炭層	鉄		53 - 5
305	不明	b36	SZ11炭層	鉄		52 - 5

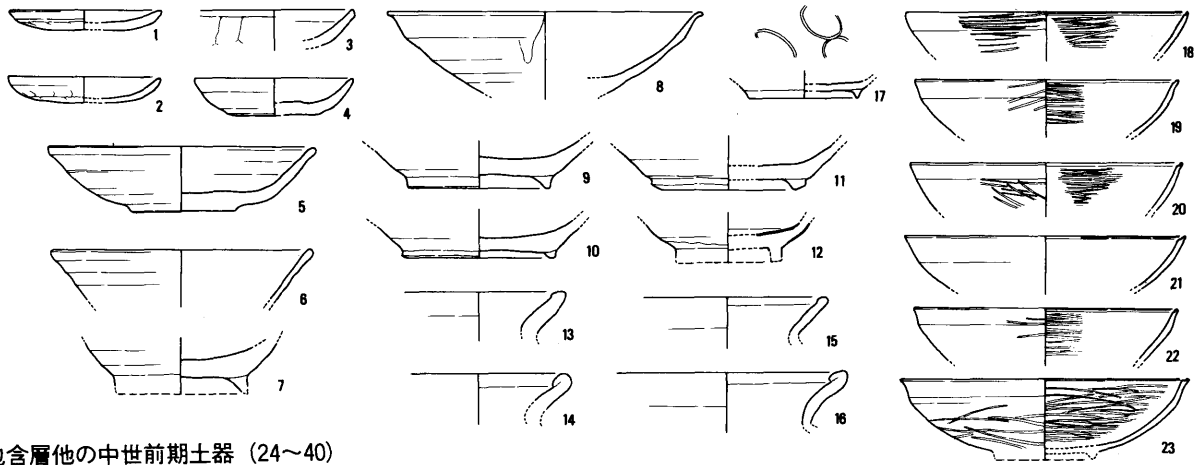
tab. 12 出土金属製品観察表

No.	形態・名称	地区	層位・遺構	国	初録年代	実測No.
315	宋通元宝	b23	PIT1	北宋	建隆元(960)年	54 - 3
316	淳化元宝	b25	SD25	北宋	淳化元(990)年	54 - 4
317	皇宋通宝	b27	SF7掘形北西	北宋	宝元2(1039)年	54 - 5
318	皇宋通宝	b38	炭層下礫層	北宋	宝元2(1039)年	54 - 7
319	永樂通宝	b37	SZ11炭層	明	永樂6(1408)年	54 - 6
320	永樂通宝	c6	暗褐土	明	永樂6(1408)年	54 - 2

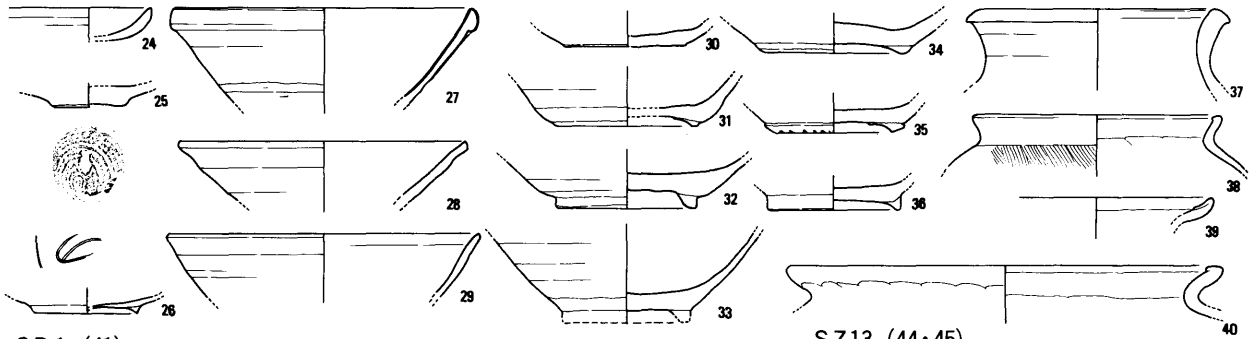
tab. 11 出土鑄貨一覧表

No.	名称	地区	層位・遺構	質	備考	実測No.
306	不明	c7	PIT2	鉄		52 - 4
307	不明	b27北	SF7東 南区	鉄		52 - 1
308	釘	b36	SZ11炭層	鉄		51 - 6
309	釘	b27	SF7粘土下掘形	鉄		51 - 3
310	釘	b27	PIT4	鉄		51 - 4
311	釘	b36	SZ11炭層	鉄		51 - 7
312	釘	c6	炭層上	鉄	(長) 6.2cm	51 - 1
313	釘	b36	SZ11炭層	鉄		51 - 5
314	釘	c5	基盤上	鉄	(長) 8.0cm	51 - 2
321	蹄鉄	b42	石垣東	鉄	近代	52 - 6

SD3 (1~23)



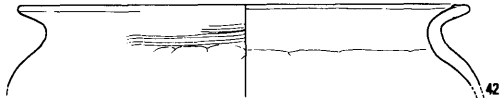
包含層他の中世前期土器 (24~40)



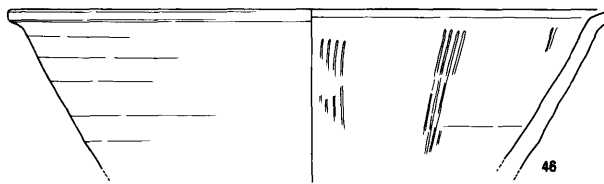
SD1 (41)



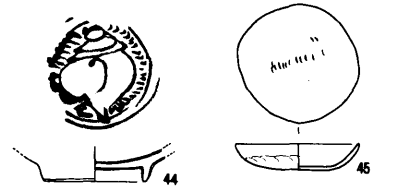
SD10 (42・43)



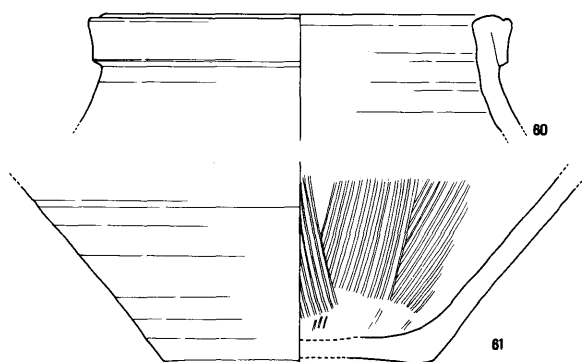
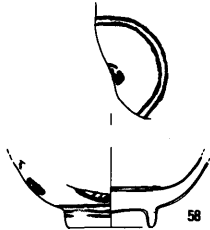
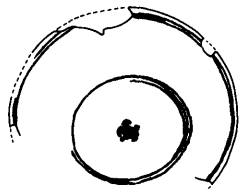
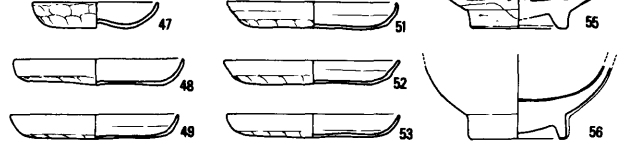
SB12 (46)



SZ13 (44・45)



C6整地土一括 (47~53)

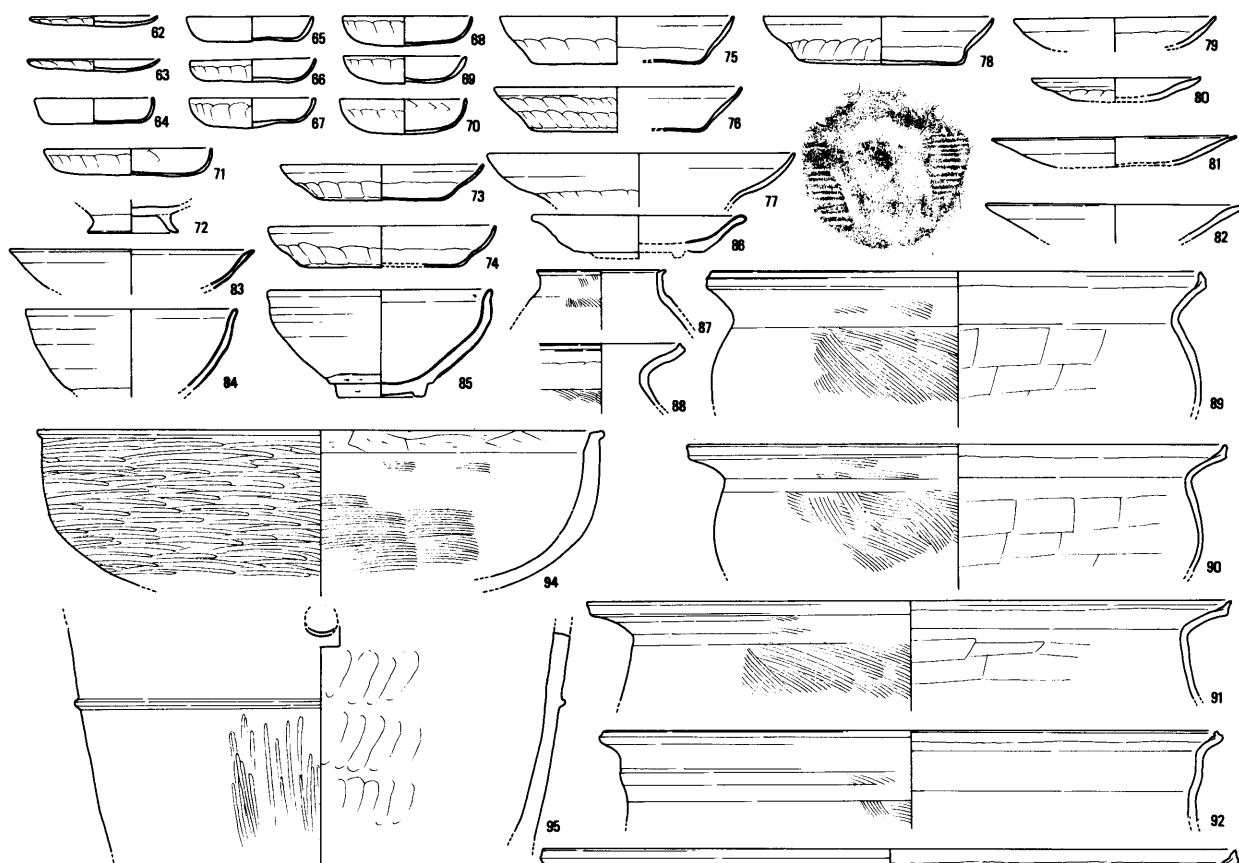


南区 (54~61)

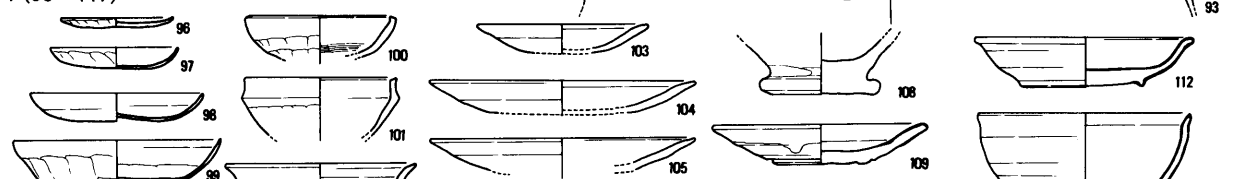


fig.10 出土遺物(1) (1 : 4)

SF7 掘形 (62~95)



SF7(96~117)



SF7粘土貼内の埋土 (118~123)

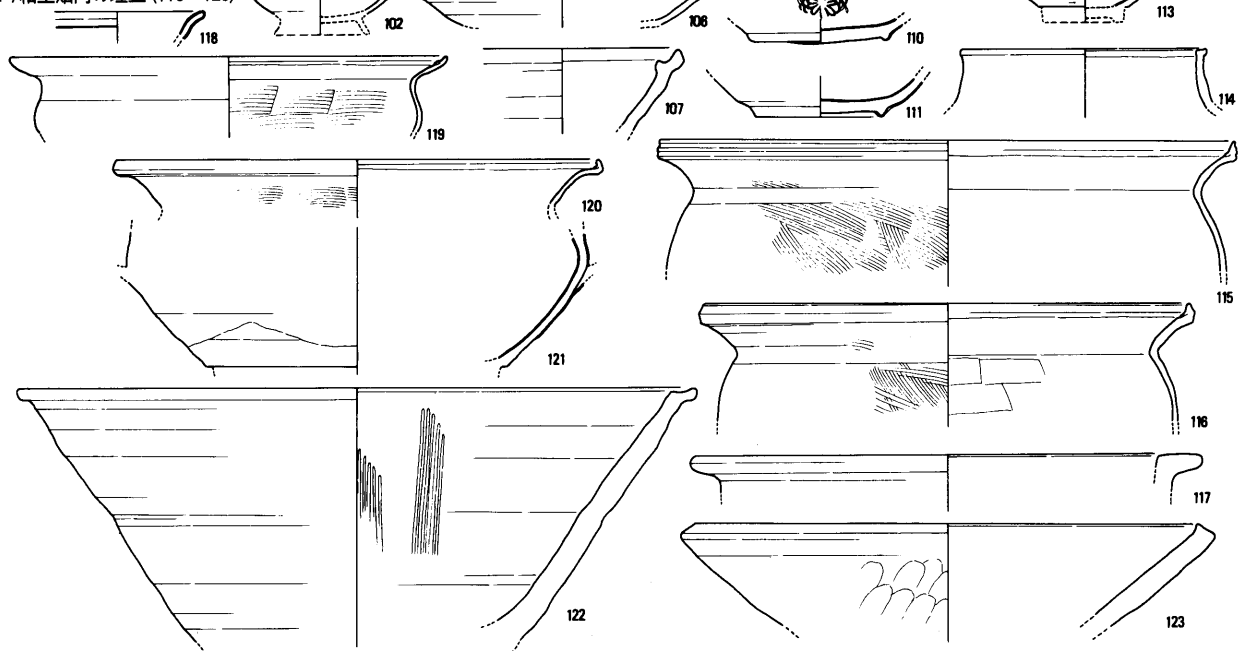


fig.11 出土遺物(2) (1:4)

SZ11 (124~229)

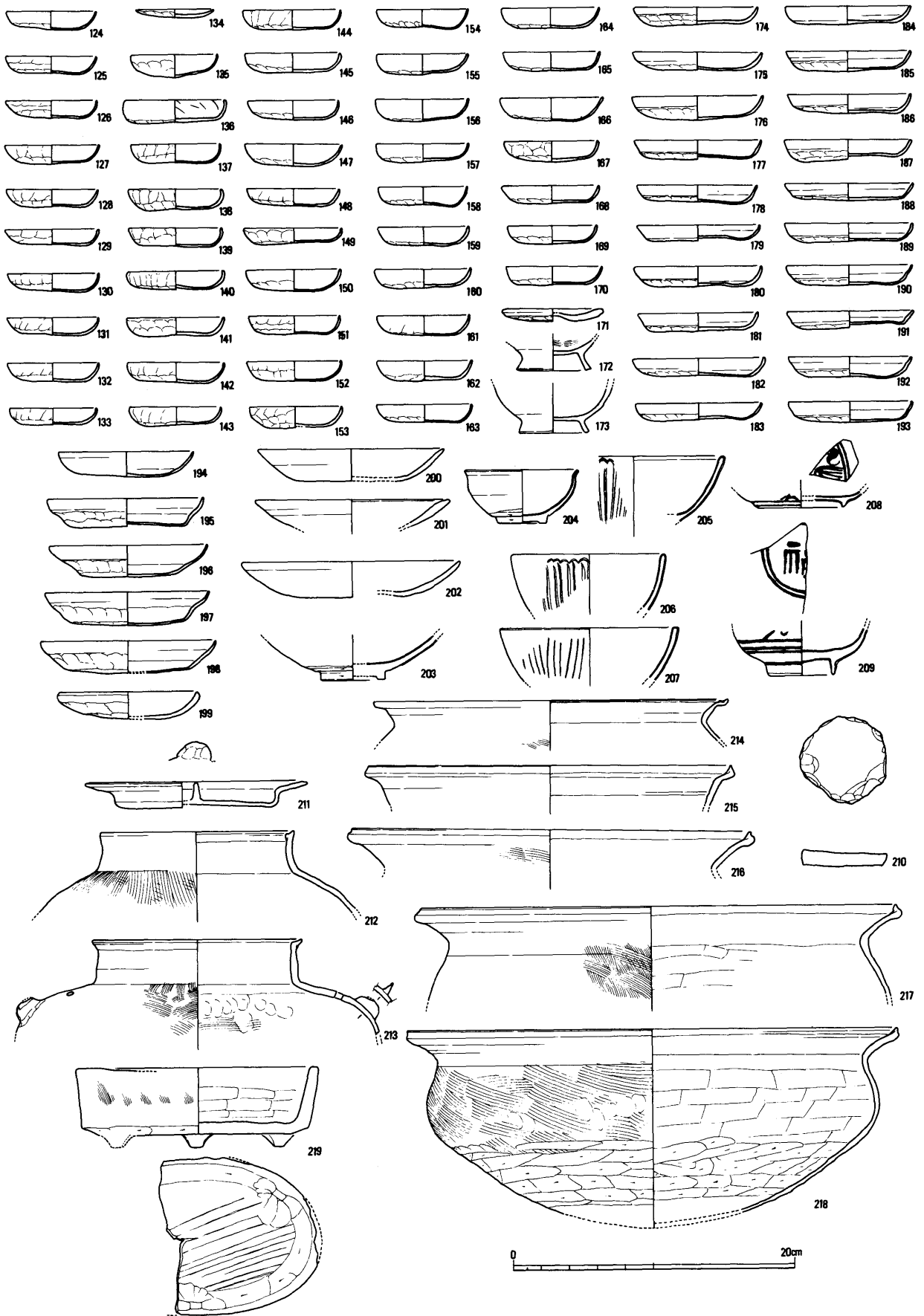


fig.12 出土遺物(3) (1 : 4)

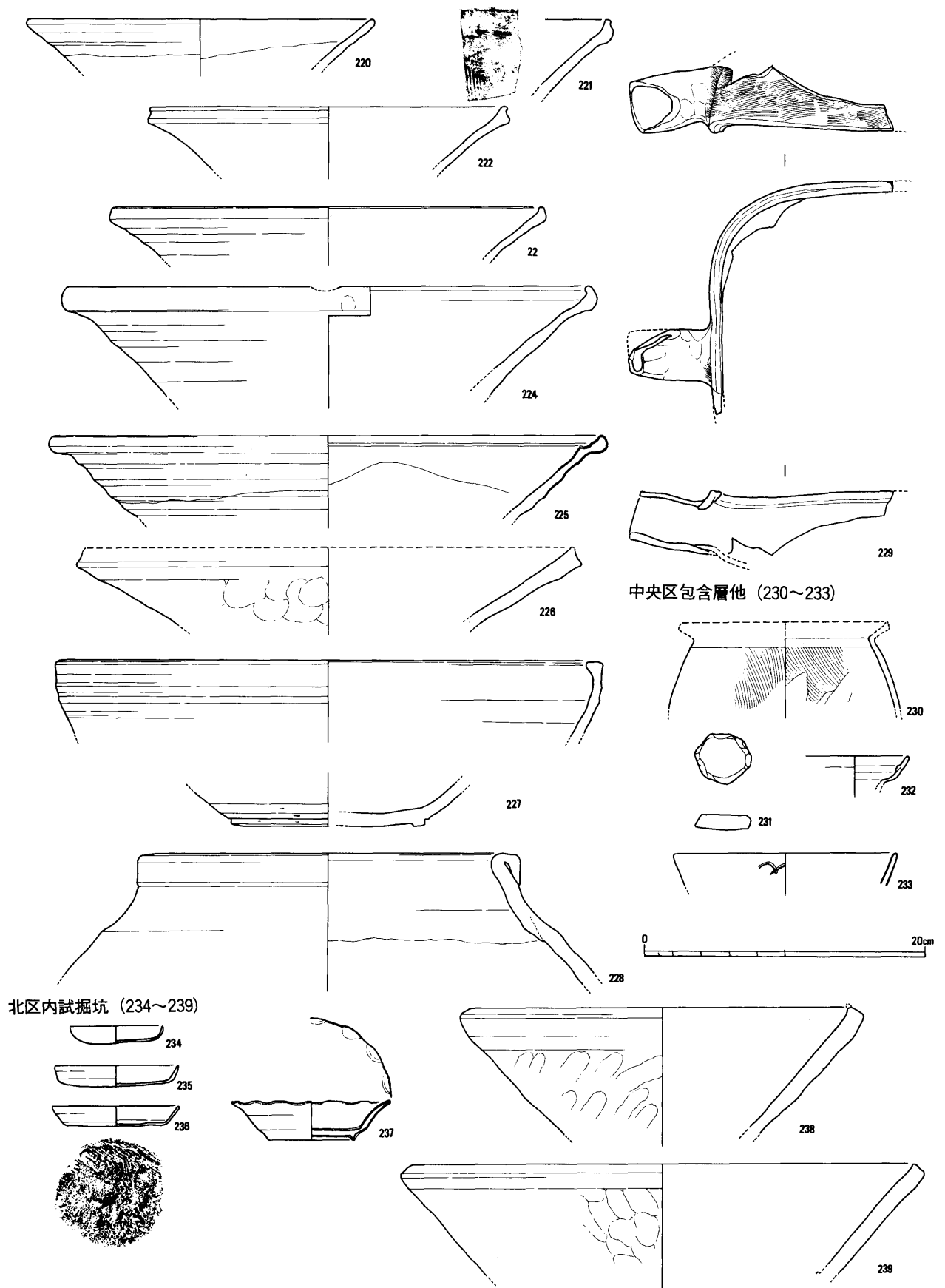


fig.13 出土遺物(4) (1:4)

北区・包含層他 (240~291)

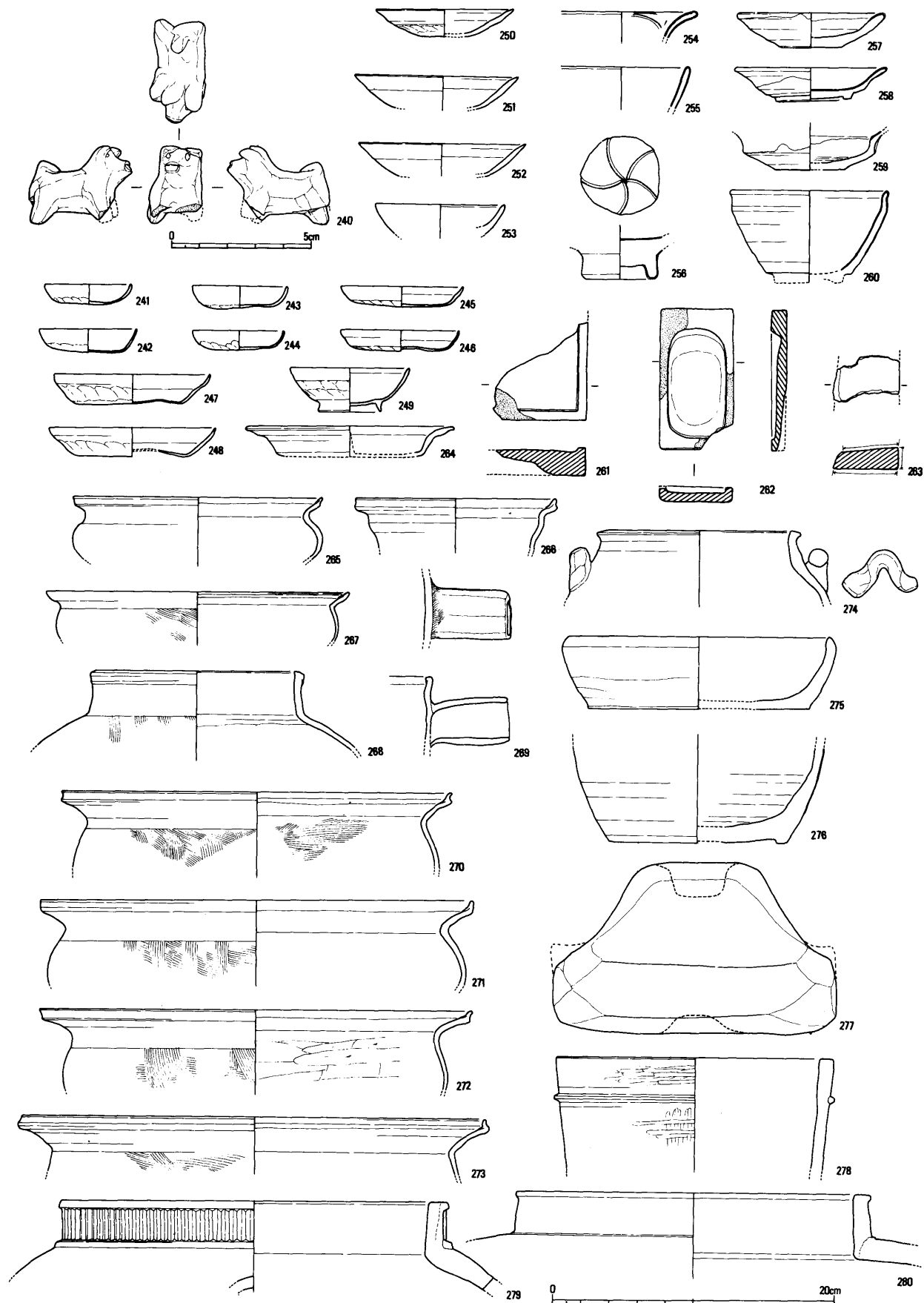
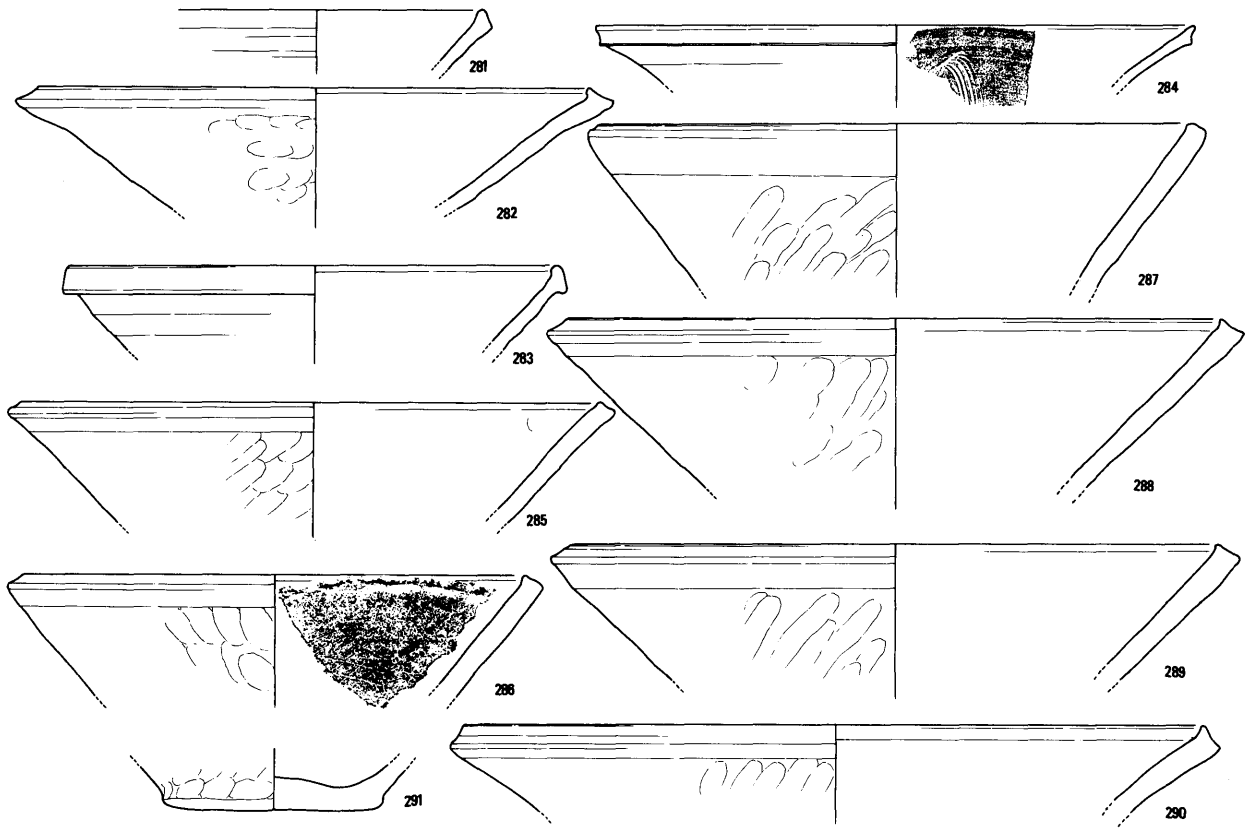


fig.14 出土遺物(5) (240は1:2、他は1:4)



瓦 (292~294)

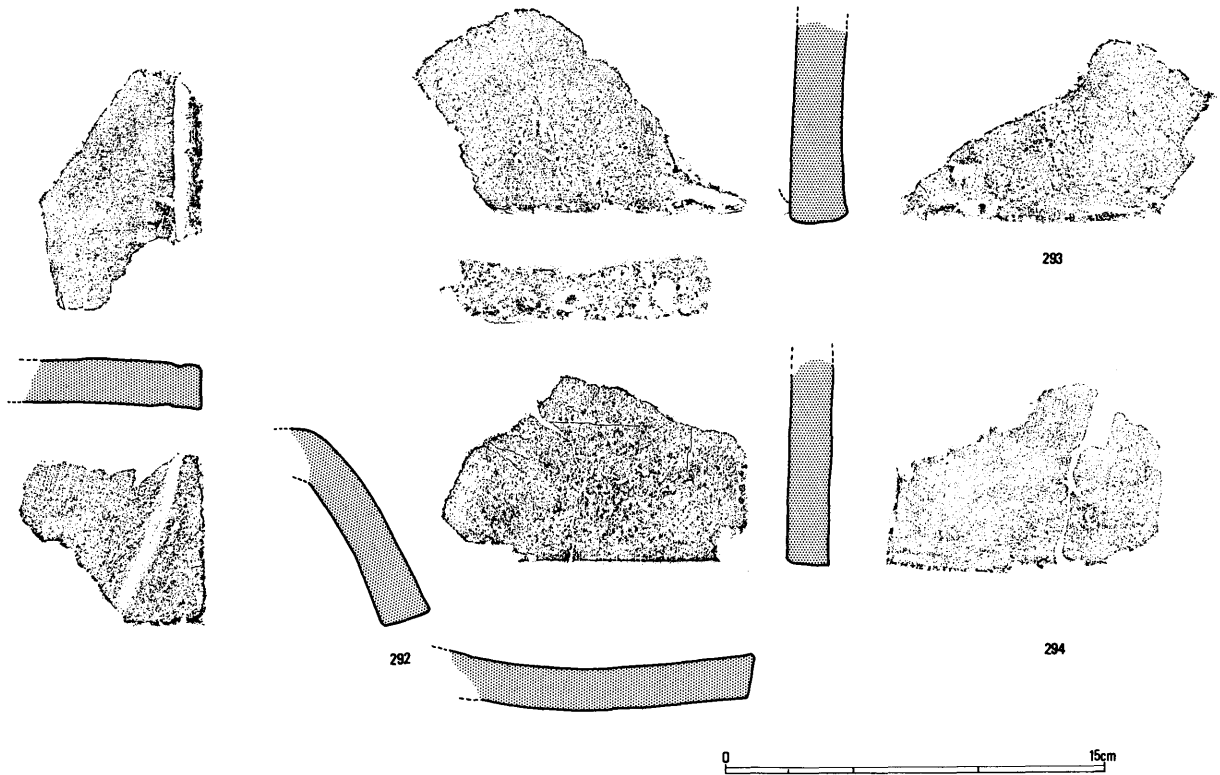


fig.15 出土遺物(6) (281~291は1 : 4、292~294は1 : 3)

金属製品・銭貨 (295~321)

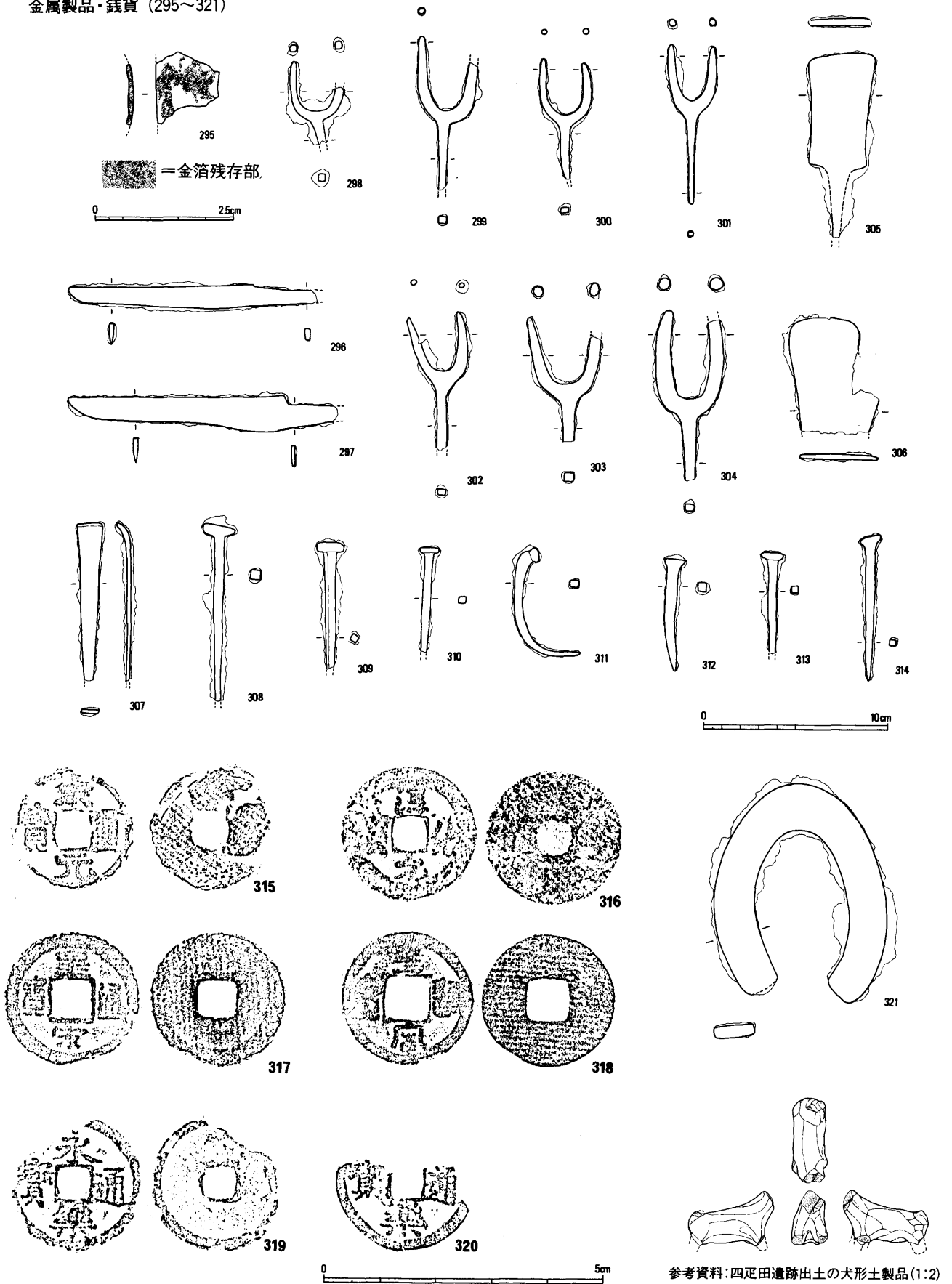


fig.16 出土遺物(7) (295、315~320は1:1、296~314・321は1:3)

V 調査のまとめと検討

今回の調査結果は、今後の美杉村地内における歴史的検討のための多くの成果を上げることができ

た。ここでは、「中世多気」における問題を中心に、いくつかの検討を行っておく。

1. 中世前期

a 遺構について

平安末から鎌倉初頭にかけての時期と考えられる3条の溝のうちSD3とSD10が調査区にほぼ平行するように検出された。調査区の西側にある丘陵から八手俣川に向けて流れる水の排水処理機能を持っていたと思われる。つまり溝と八手俣川との間に何らかの施設があったと考えられる。しかし今回の東西幅約3mの調査では詳細は不明である。北畠氏入部以前の遺構はまだほとんど確認されておらず、今後の調査の貴重な資料となるであろう。

(越賀弘幸)

b 土器相について

今回の調査では、溝SD3を中心に、12世紀後葉から13世紀前葉の遺物が出土している。量的には決して多いとはいえないものの、多気で当該時期の土器が比較的まとまって出土したのは今回が初めてである。tab.13に全体的な組成についてまとめてみた。時期幅が比較的長いので、あまり厳密なものではないが、大方の傾向は把握できるものとする。

この組成を見て注目されるのは、瓦器・陶器碗(以下、「山茶碗」)の比とロクロ土師器類の突出である。特に、瓦器碗と山茶碗とがほぼ2:3の関係

にあることが注意される。

谷を隔てて西にあたる美杉村八知・東川遺跡でも組成が検討されており^①、破片数で見ると瓦器碗:山茶碗の比がほぼ3:1の割合となっている。東川遺跡と同一水系の下流、美杉村竹原・前垣内遺跡の採集資料では、瓦器:山茶碗=38:71で、山茶碗の比率が高くなっている^②。

地理的な環境を考慮すると、雲出川本流の流域で、より下流の竹原地区で山茶碗の出土が多いことは理解できるが、八知地区で山茶碗が急激に減少する傾向や、位置的には東で、「山茶碗分布圏」に近い多気地区で山茶碗と瓦器とが競合関係にあることは今後、十分な注意が必要といえる。

山茶碗の場合、伊勢と伊賀との境界をなす青山山地を境に、伊賀側ではほとんど出土しないのに対し、瓦器は青山山地を越えた伊勢の白山町内や一志町内でも一定量の出土が確認できる^③。そもそも、両者の土器ともに伊勢在地での生産品ではなく、なんらかの方法のもと、商品流通に近い状況での流通が想定されるのであるが、瓦器と山茶碗とでは分布のあり方にかかなりの違いが想定できそうである。これは、瓦器が陸上交通による交易なのに対し、山茶碗が、

種類	器種	口縁部		体部		底部		合計	率(%)		
		実	未	実	未	実	未		個別	機能別	質別
土師器	皿	2	4	0	0	0	0	6	4.69	10.94	25.01
	小皿	5	3	0	0	0	0	8	6.25		
	甕・鍋	8	6	0	2	0	0	18	14.07		
瓦器	碗	6	9	0	5	2	3	25	19.53	20.31	20.31
	小碗・小皿	0	1	0	0	0	0	1	0.78		
陶器	碗	3	10	0	9	10	8	40	31.25	34.37	35.93
	小碗・小皿	0	2	0	0	0	2	4	3.12		
	壺	1	0	0	1	0	0	2	1.56		
ロクロ土師器	碗	1	0	0	0	2	2	5	3.91	16.41	16.41
	皿	1	0	1	0	1	6	9	7.03		
	小皿	1	0	1	0	1	4	7	5.47		
青磁	碗	0	0	0	1	0	0	1	0.78	0.78	2.34
	小皿	0	0	0	0	0	0	0	0		
白磁	碗	1	0	0	0	1	0	2	1.56	1.56	2.34
	小皿	0	0	0	0	0	0	0	0		
合計								128	100.00	100.00	100.00

tab.13 多気遺跡群上村地区における12世紀後葉から13世紀前葉頃の土器組成

※ロクロ土師器皿と小皿には口縁部から底部にかけて残存する個体がそれぞれ1個体ずつあるため、口縁部・体部・底部に各1点ずつとしてカウントした。

※「実」は実測したもの、「未」は未実測のものである。

海上交通によって運ばれてきたものが2次的に拡散するものであることから発生した状況とも考えられる。とすれば、瓦器が比較的生産者に近い集団を媒

介とした流通で、山茶碗の伊勢における流通は、生産者とは直結しない集団を媒介とした流通であると考えられることも可能である。(伊藤裕偉)

2. 中世後期

a 掘立柱建物について

今回の調査区は、西側の丘陵地と八手俣川との間に挟まれたかなり狭い低位河岸段丘上に位置する場所であるにも関わらず、掘立柱建物がいくつか検出された。(fig.17)

SB12は南北3間(9尺等間)以上×東西2間(3尺の廂と6尺5寸)以上の建物である。西側に廂構造と思われる3尺の柱間を検出したが、これをもってこの建物の棟方向を決定づける資料とはなり難い。

地形的に見ても西側に建物が広がるとは考えにくい。東側を流れる八手俣川までの間に広がる建物であろう。

平成2年度調査で検出されたSB301^④の9間×4間とは全体的規模としては比べるべくもないが、柱間だけを見ればSB12の9尺はかなり広い。南北両面に廂が確認できなかったことから、西面のみの片面廂、あるいは東西両面廂の建物が想定されるが、東西幅3mの調査であり、この建物の東方向への広がりには不明である。なお、SB12柱穴の一つであるb23グリッドpit1埋土から、形状は不明であるが金箔装の銅製品が出土している^⑤。

建物を検討する場合、1棟単独ではなく建物群としての企画性が重要となるが、今回の調査では複数の建物の位置関係についてはほとんどわかっていない。ただし、SB12とSB15の柱方向はN18°Eでほぼ一致し、両建物の北辺同士の距離は約15m(50尺)である。同時期に存在した建物群と考えてよい。さらに、SA14とSA16もN15°Eでほぼ一直線上に位置する。これらもまた、同時期の遺構であろう。SA16はSA14の南端から約16.5m(55尺)の地点から始まり、柱間はそれぞれ9尺(SA14)と6尺5寸(SA16)である。異なる柱間から柵の機能は想定しにくく、東側に広がる建物群の可能性はあるが、詳細は今後の調査結果を待つほかはない。

b 竈について

SF2は煮炊き用の竈であろう。赤く焼け締まった本体とその使用後の炭・灰を掻き出した痕跡が6層検出された。

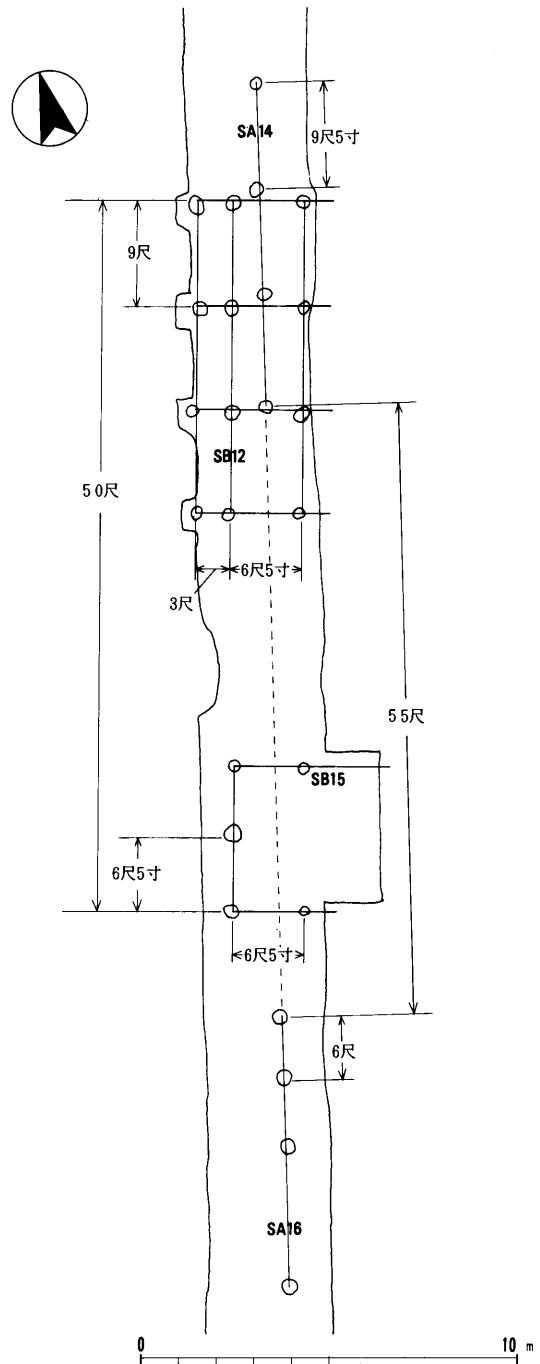


fig.17 掘立柱建物・柱列配置図(1:200)

この時期の竈は県内での確認例は少ない。多気では土井沖地区の調査で検出された竈状石組SK172^⑥がある。竈袖部がピット状に窪むことはSF2の構造と類似している。相違点としては、石組・粘土貼りの有無、床面の焼け具合などである。また、同調査で検出したSK185・186やSK101も石組を持ち、焼土・炭が混じった層が堆積していた。これらも竈状遺構の類例として興味深い^⑦。他に、員弁郡東員町の山田城跡の調査で検出されたSK20^⑧や名張市赤目町の壇・柏原遺跡のSK5、SX6^⑨も、周囲を石組で囲み埋土中に焼土や炭が混じる土坑である。

以上、いくつか竈と思われる土坑の類例を挙げてみた。今回のSF2では竈本体の床面には石が設置されていたような痕跡はない。前庭部に集中して出土した礫群が、上部に組まれていた石組の可能性はあるが、構造は不明である。石組を持たない竈やその上部構造等については今後の調査事例を待ちたい。

(越賀弘幸)

c 多気での土器生産について

今回出土した遺物のなかで、特にc6整地土層から一括出土した土師器皿類を注目したい。このうちの3枚には、fig.18のような黒斑部がある。これは

それぞれの黒斑範囲部分が外側になるように重ね合わせていくと、過不足なく合致する。この状況を断面図で示すと、fig.18のようになる。このことから、この3枚の土師器皿については、このように重ね合わせた状況のもとで焼成され、そのまま廃棄されたものと考えることができよう。

同時に焼成された土器が同一場所に廃棄されているということは、生産された状態のまま流通網に乗り、それを購入した者がそのまま廃棄したという可能性もなくはない。しかし、常識的には、この付近に土器生産の場があったことを考えるのが妥当であろう。その可能性を示すものとしてc7グリッドpit3と窯状遺構SF7がある。c7グリッドpit3からは、明確な遺物こそ出土しなかったものの、形状は逆円錐形をなすロクロピット状であり、内部には窯壁片らしきものが充満していた。窯状遺構SF7は、掘形とした遺構内からも多量の土器や鉄製品が出土するという状況下にあることや、黄色粘土部分の被熱が極めて弱いため、窯ではない可能性もある。しかし、その埋土中から窯壁ないしは何らかの部材と考えられるスサ入り粘土塊が出土していることから、土器ではないにしろ、何らかの生産

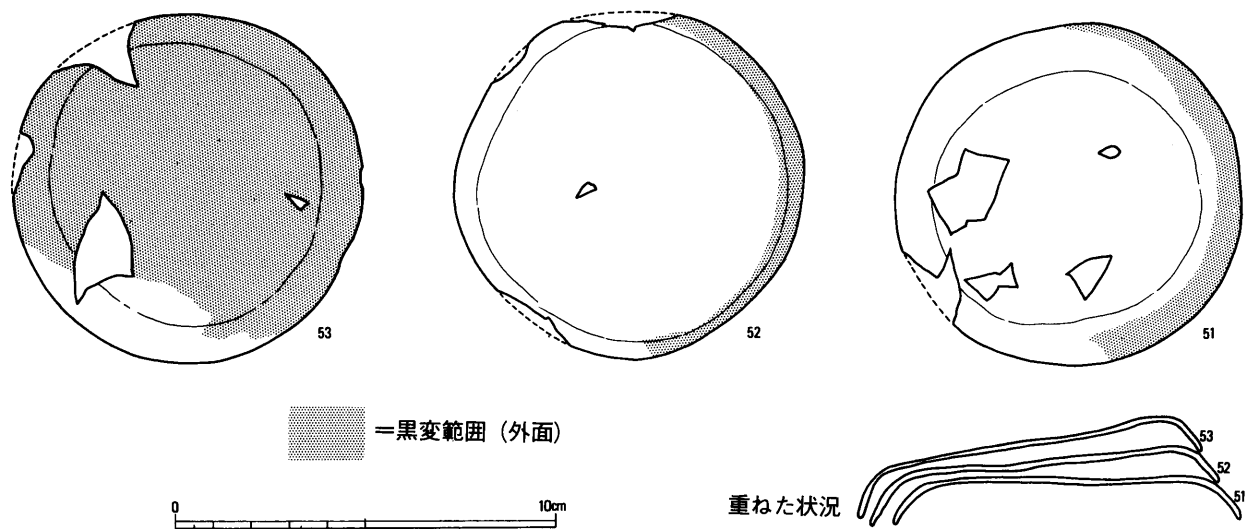


fig.18 重ね焼き痕のある土師器皿模式図(1:2)

番号	遺跡名	所在地	体長	体高	時期	備考
15	田中名遺跡	一志郡白山町山田野	4.2	—		S60県調査
16	多気遺跡群上村地区	一志郡美杉村下多気	3.5	2.8	15後～16前	当報告
17	齋宮跡(第91次)	多気郡明和町齋宮	6.6	4.2		
18	四正田遺跡	多気郡多気町四正田	—	—		当報告に図を掲載
19	火山遺跡	上野市山神	5.2	4.6		H7県調査

tab.14 県内犬形土製品出土遺跡一覧(補遺)*1～14は註13文献に掲載

の場である可能性は高い。

多気内で土器生産を推定可能な場としては、町屋地区の「ホウロクマチ」と呼ばれる場所を挙げることができる^⑩。また、南伊勢系土師器の中世後期の動向には、北畠氏の関連も読み取ることができる^⑪。今回確認された、重ね焼き痕のある土器が南伊勢系土師器であることも、多気の地に移住した南伊勢系土師器工人が存在していた可能性を示すものとして、興味深い。今後、今回の調査区周辺に、土器生産に関した明確な遺構が発見される可能性は高い。

(伊藤裕偉)

d 犬形土製品について

犬形土製品の確認は、多気では3例目となる^⑬。第IV章でも触れたが、安芸郡芸濃町・下川遺跡出土のものと同酷似している。しかし、これまでに三重県下で出土しているものを通観すれば、それぞれに際違った違いが存在しているわけではなく、成形方法に大きな違いは出そうにない。

三重県下での出土地点を見ると、中～北伊勢と伊賀に集中している。南伊勢での確認例は乏しく、わずかに明和町斎宮跡^⑭や多気町四正田遺跡での出土がある程度である。時期的には15世紀後葉から16世紀代という傾向が窺えるものの、具体的な検討にはもう少し資料蓄積が必要である。(伊藤裕偉)

以上、今回の調査によって得ることができた極めて限定された資料からも、「多気」の興味深い事例

註

- ① 竹田憲治「東川遺跡」(『六地藏A遺跡・六地藏B遺跡・高塚宅跡・東川遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994年)
- ② 中世古尚志「中世土器の流通」(『美杉村の遺跡』皇學館大学考古学研究会、1995年)
- ③ 白山町・家野遺跡や前川嘉宏氏の集計の状況から、それを窺うことができる。服部久士「家野遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊、1990年)および前川嘉宏「三重県における山茶碗の出土状況」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター、1994年)
- ④ 伊藤裕偉「多気遺跡群発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター、1993年)
- ⑤ 平成4年度美杉村教育委員会調査『北畠氏館跡第2次発掘調査略報』
- ⑥ 註④に同じ
- ⑦ 註④に同じ
- ⑧ 久志本鉄也「山田城跡発掘調査報告」(東員町教育委員会、1984年)

の一端が明らかになった。

今回の調査区は、狭い低位河岸段丘上に位置し、居住空間としては条件のよくない場所であったが、少なくとも2時期と考えられる計画的に配された建物群や、土器生産を含めた工人の存在を想定できる遺構・遺物がいくつか見つかった。これは多気の盆地内における土地利用度合いの高さを示すものであり、「中世多気」の繁栄を物語るものであろう。

ことに生産にかかわる遺構・遺物は、「多気」が消費集団のみならず、生産集団をも内包する都市的機能を持っていた可能性をさらに高める結果と言えよう。また、このような生産にかかわる集団が、北畠氏館にほど近い地区に配されたことは、多気の全体構造を考える上で重要な視点の一つとなろう。

一方この地区は、北畠氏館とは小さな谷を隔てて近接する場所であり、川が丘陵にせまり、防衛上重要な地点にあたるため、家臣団の居住空間である可能性もある。調査区南辺出土の大量に投棄された土師器皿は、岩手県平泉町・柳の御所遺跡、鎌倉の都市遺跡でも見られるように、饗宴などの行為の後で行われたものである可能性が高く^⑮、SB 12柱穴出土の金箔装の銅製品も、この近辺に比較的上位階級の人々が生活していた可能性を示している。

しかし、今回の調査は非常に限られた範囲であったため、この地区のごく一部しか確認することはできなかった。今回問題点として指摘した部分については、今後の調査を待つほかはない。(越賀弘幸)

⑨ 田阪仁「壇・柏原遺跡」(『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1984年)ただし、報告書では中世墓あるいは小石室の可能性を考えており、竈の可能性には触れられていない。

⑩ 註④に同じ

⑪ 小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態～伊勢国有爾郷を素材として～」、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター、1992年)

⑫ 南伊勢系土師器工人の内部には多様な集団を想定しているため、ここでいう“移住した工人”とは、その中の一部の集団と認識していることを念のため付け加えておく。

⑬ 倉田直純「下川遺跡」(『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1990年) tab.14を参照。

⑭ 大川勝宏「第91次調査」(『史跡斎宮跡平成3年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1992年)

⑮ 藤原良章「中世の食器・考へくわらけ」ノート」(『列島の文化史』5 1988)

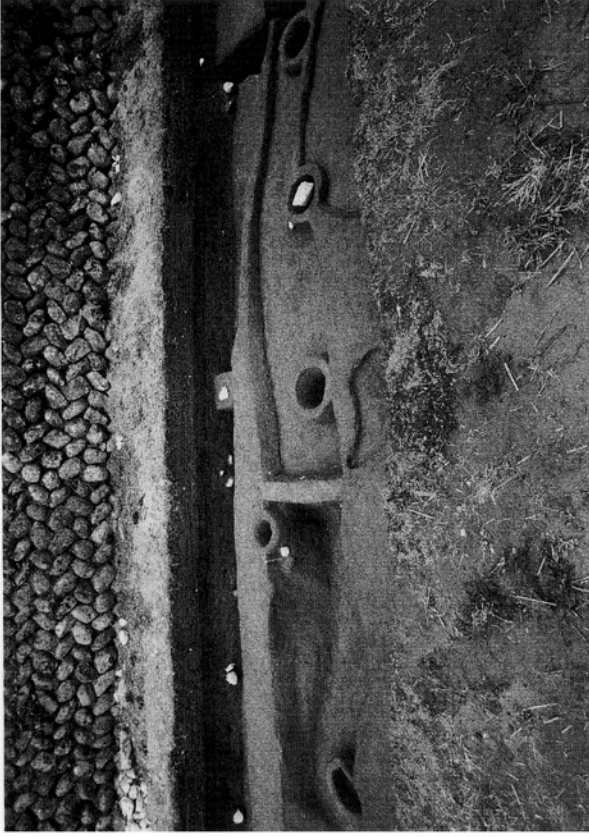
P L. 1 調査区遺構(1)



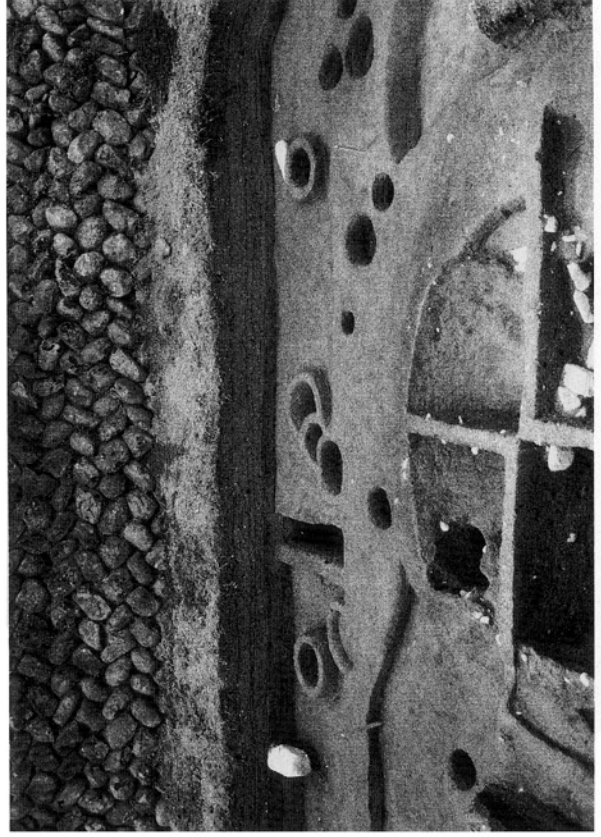
北調査区全景（南から）



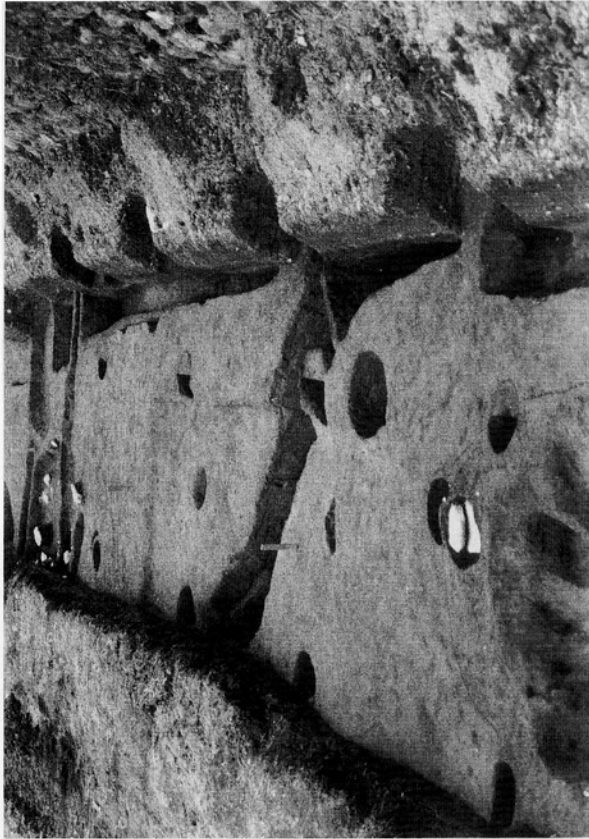
南調査区全景（北から）



SA16 (東から)



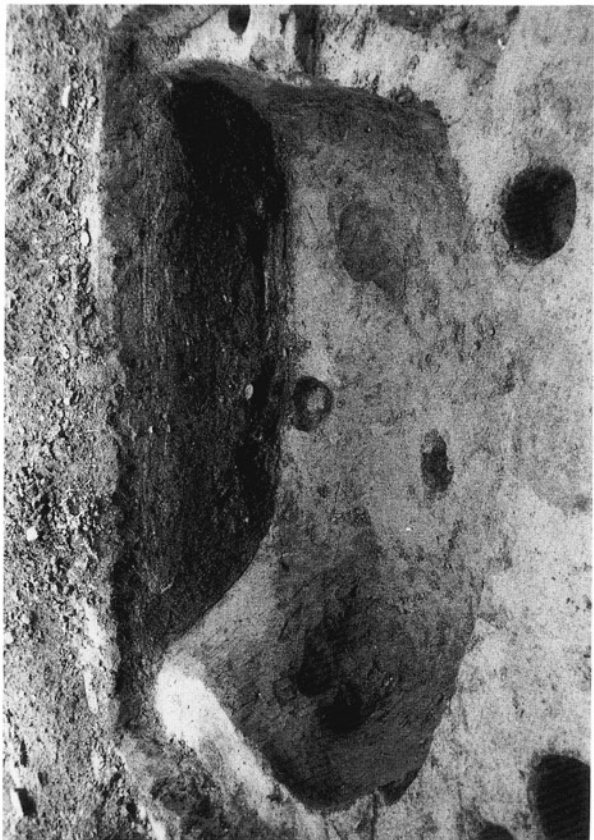
SB15・SF7粘土貼(東から)



SB12 (北から)



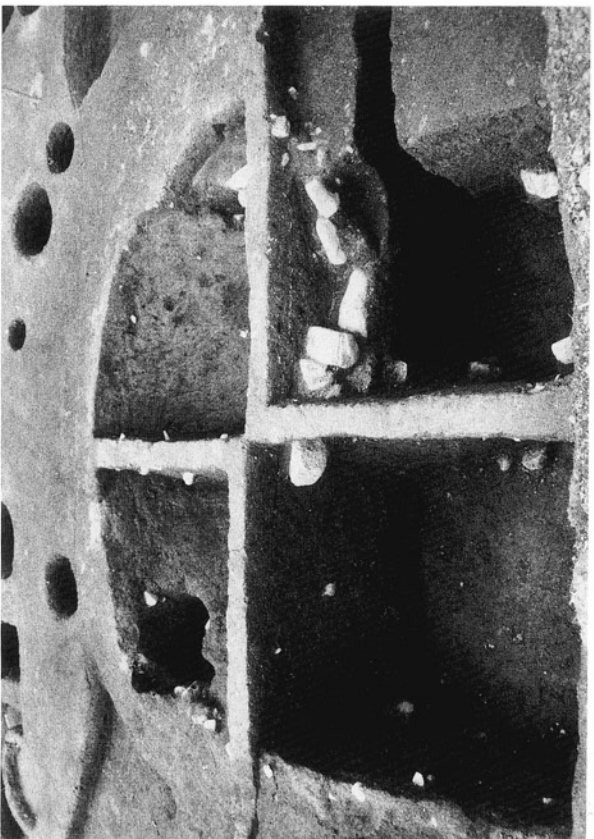
SB12 (東から)



S F 7 完掘 (西から)



S Z 19 (北東から)



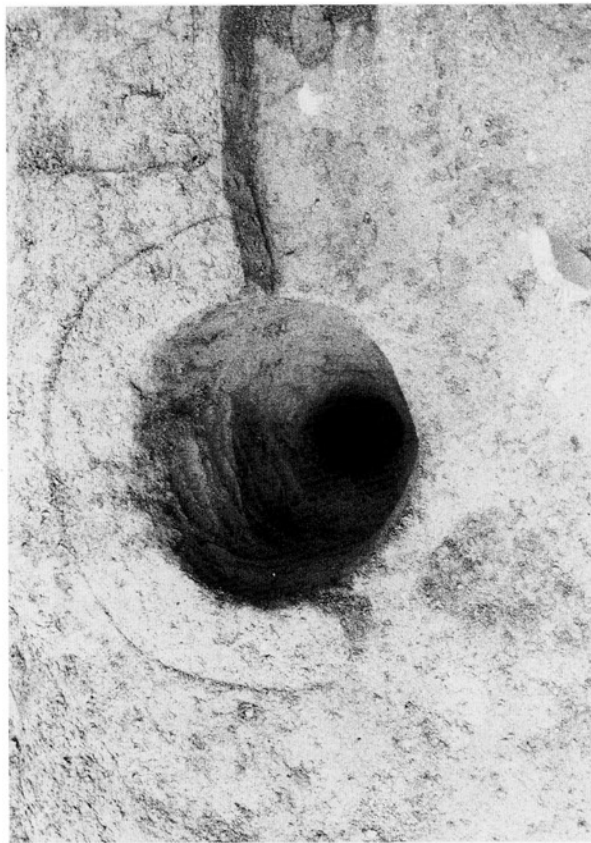
S F 7 (東から)



S F 7 土層断面 (北から)



SZ11 土師器皿出土状況 (南から)



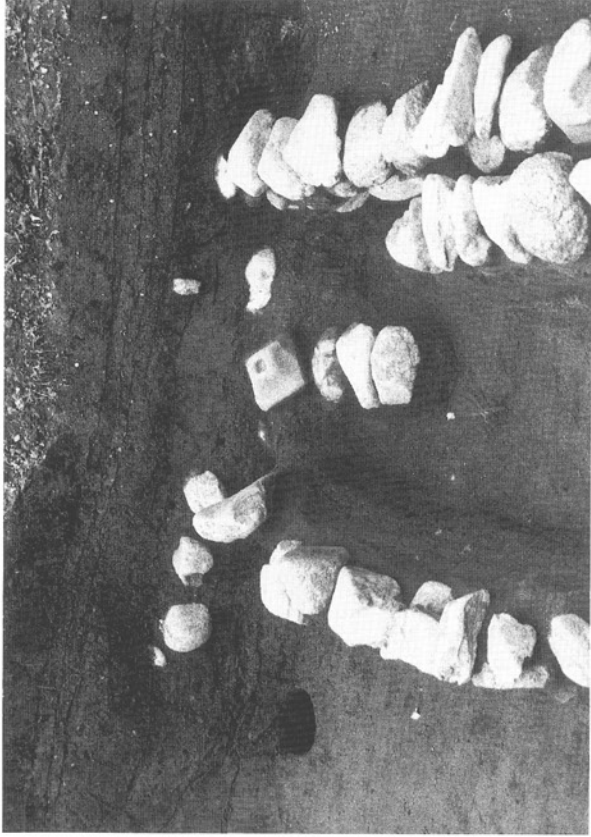
C7 グリット ピット3 (南から)



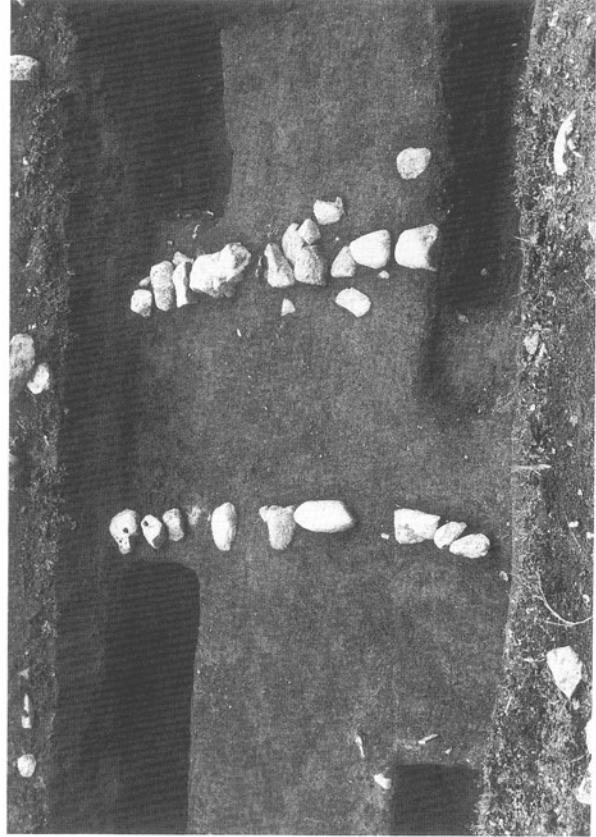
SF2 完掘 (北西から)



SF2 (北西から)



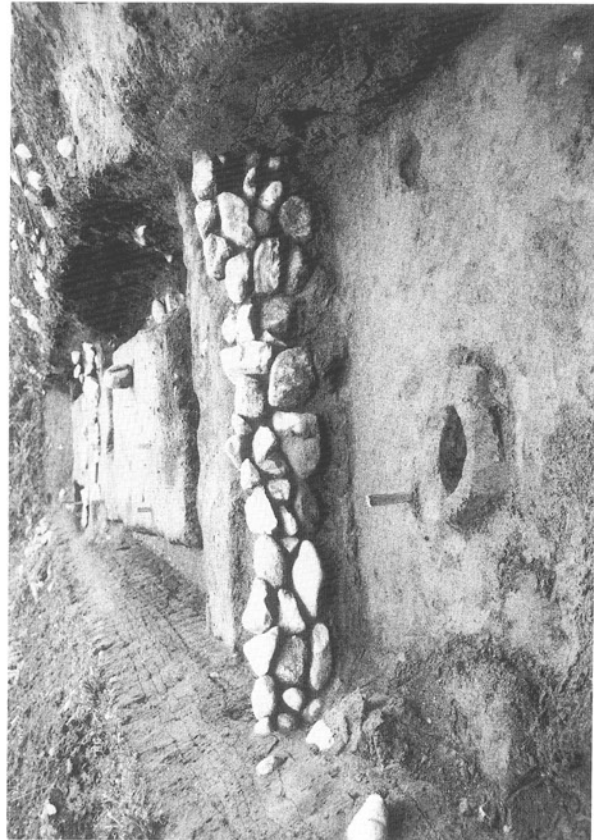
S Z 17 五輪塔出土状況(東から)



S Z 18 (東から)



S Z 17 (西から)



S Z 17 最北部石垣(南から)

PL.6 出土遺物(1)

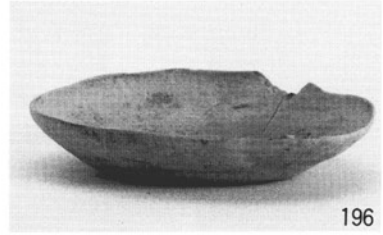


51 52 53

土師器皿 三枚重ね状況



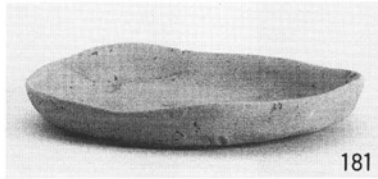
156



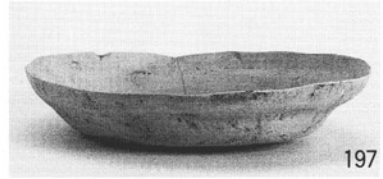
196



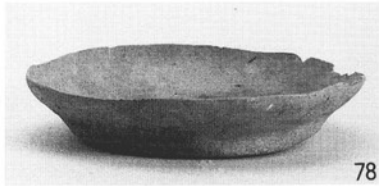
65



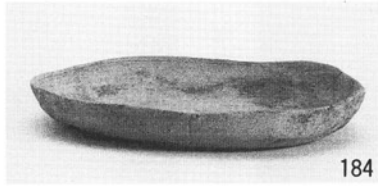
181



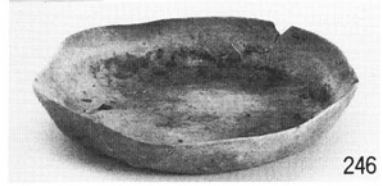
197



78



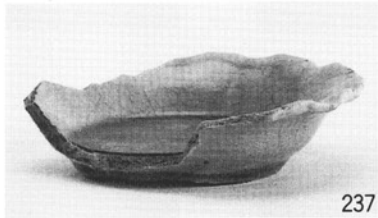
184



246



112



237



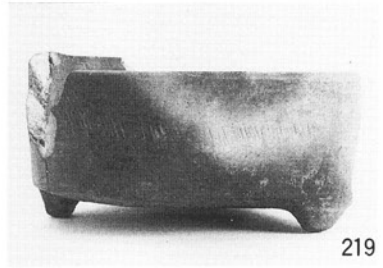
258



57



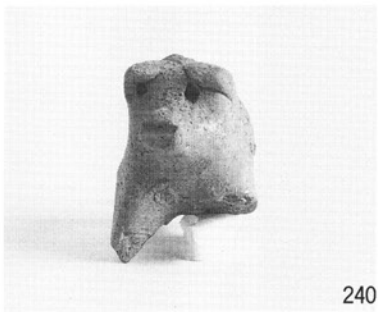
85



219

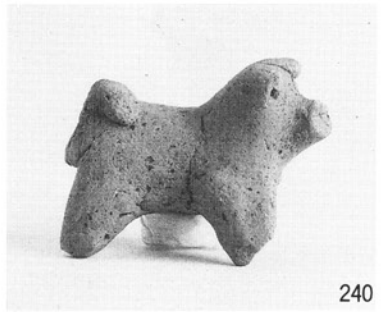


227

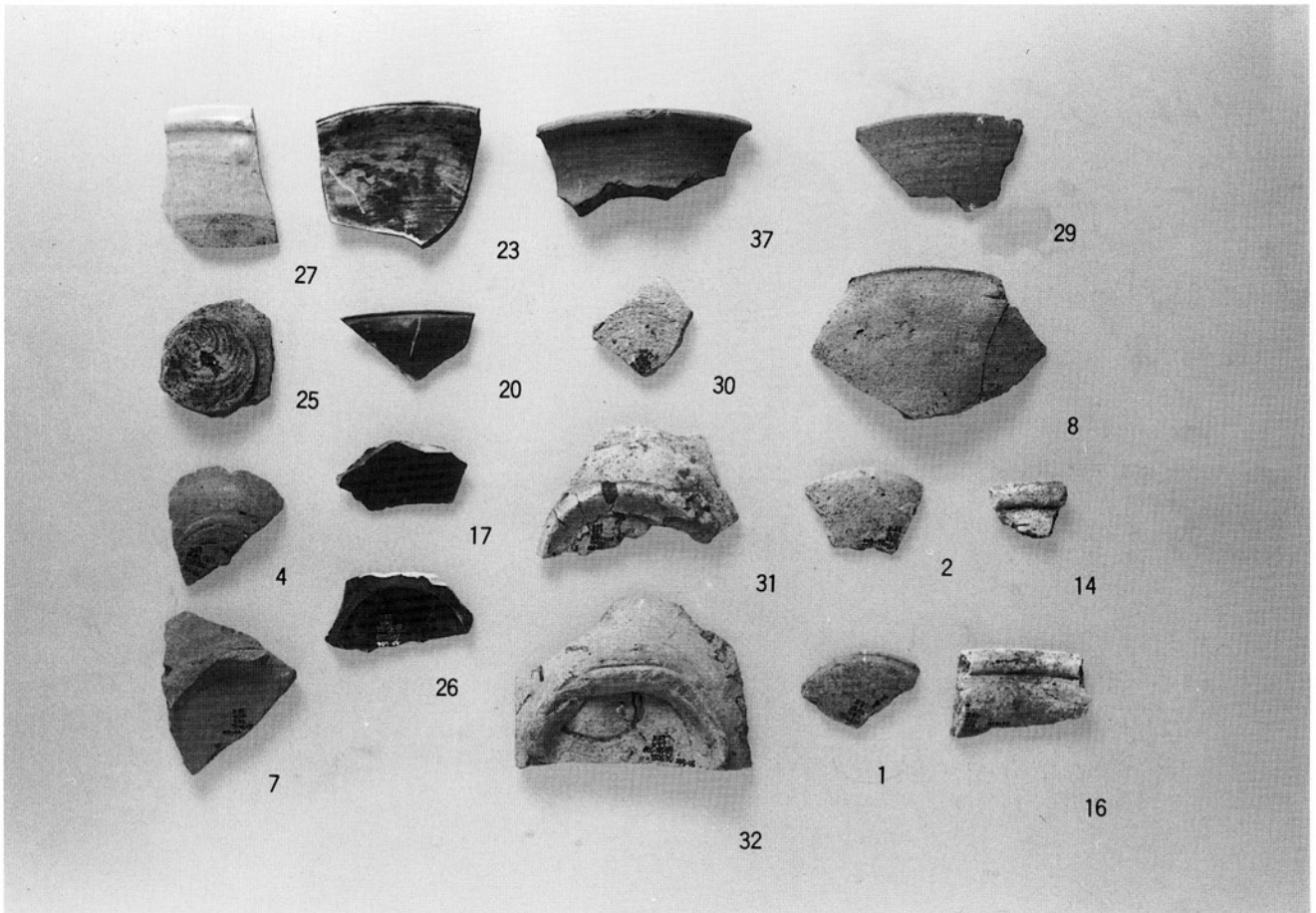


240

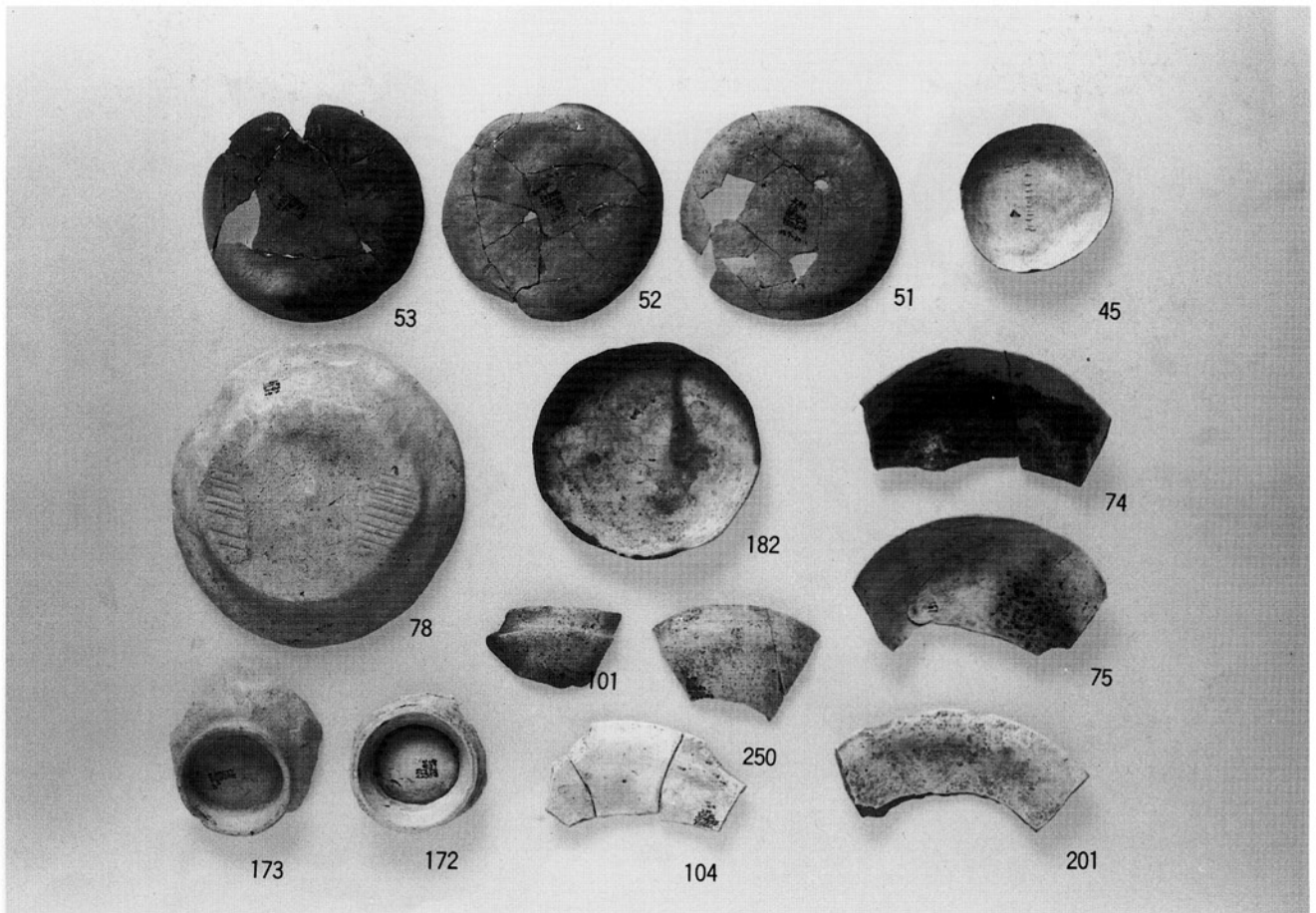
犬形土製品 (約1:1)



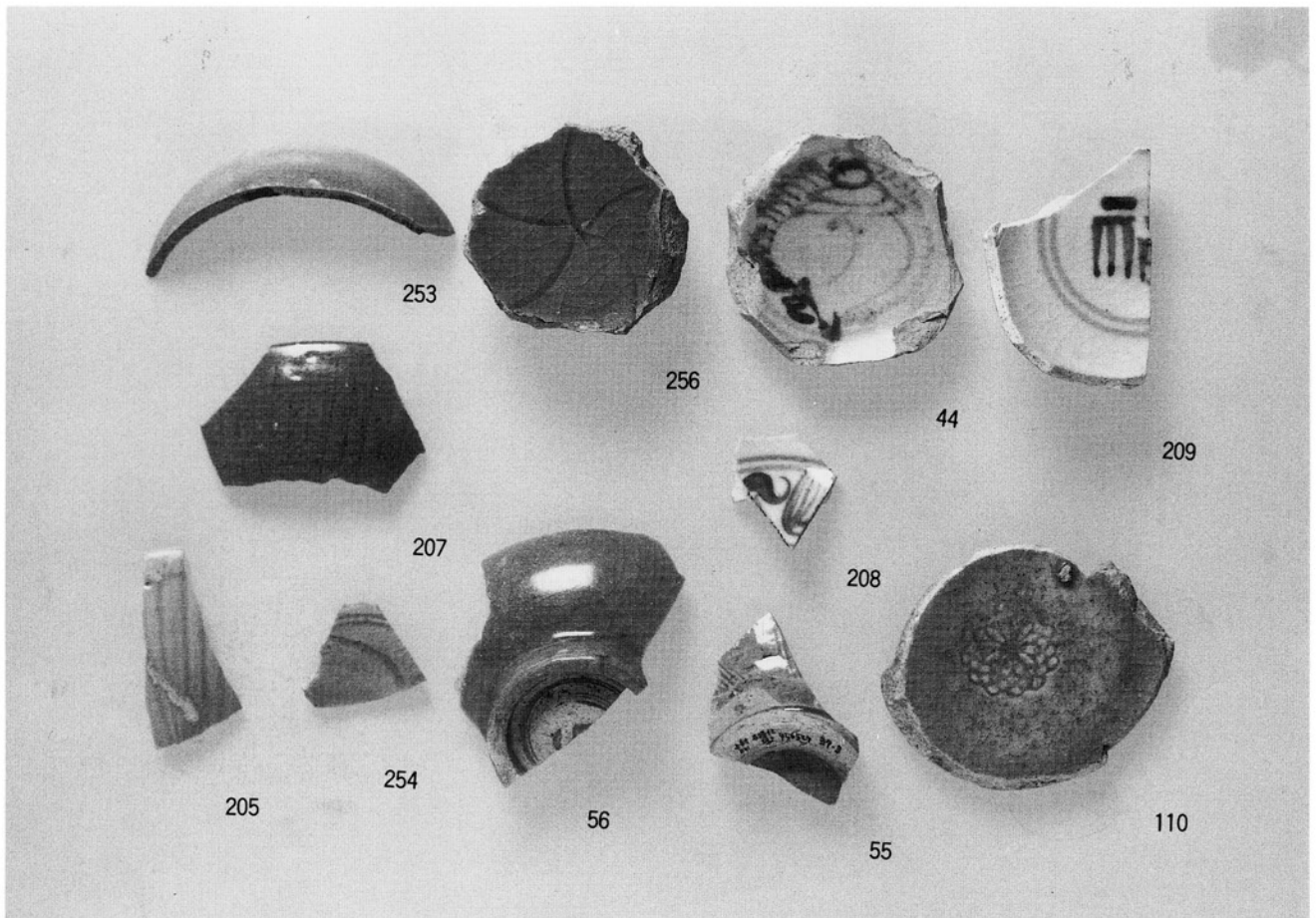
240



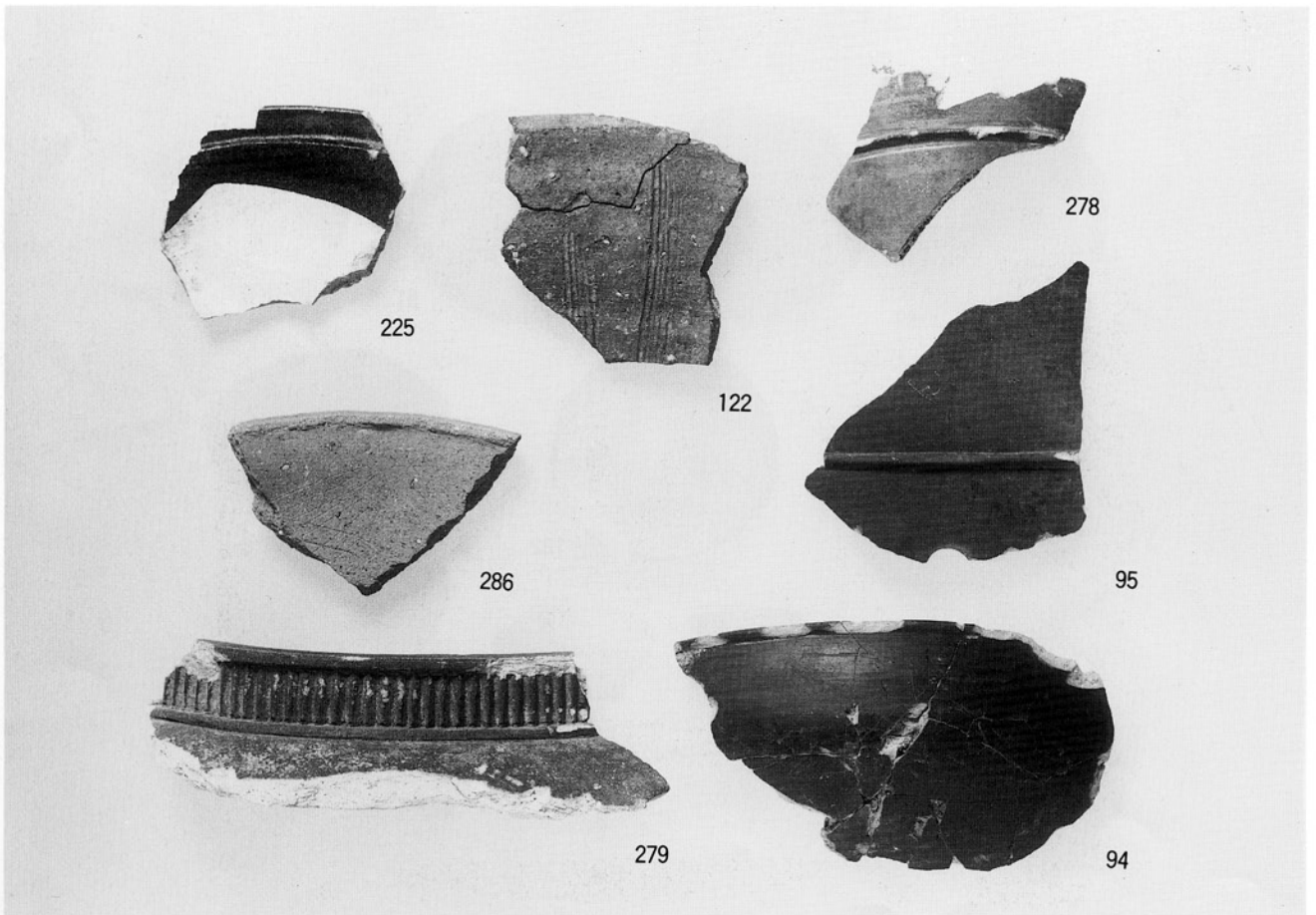
中世前期の土器類



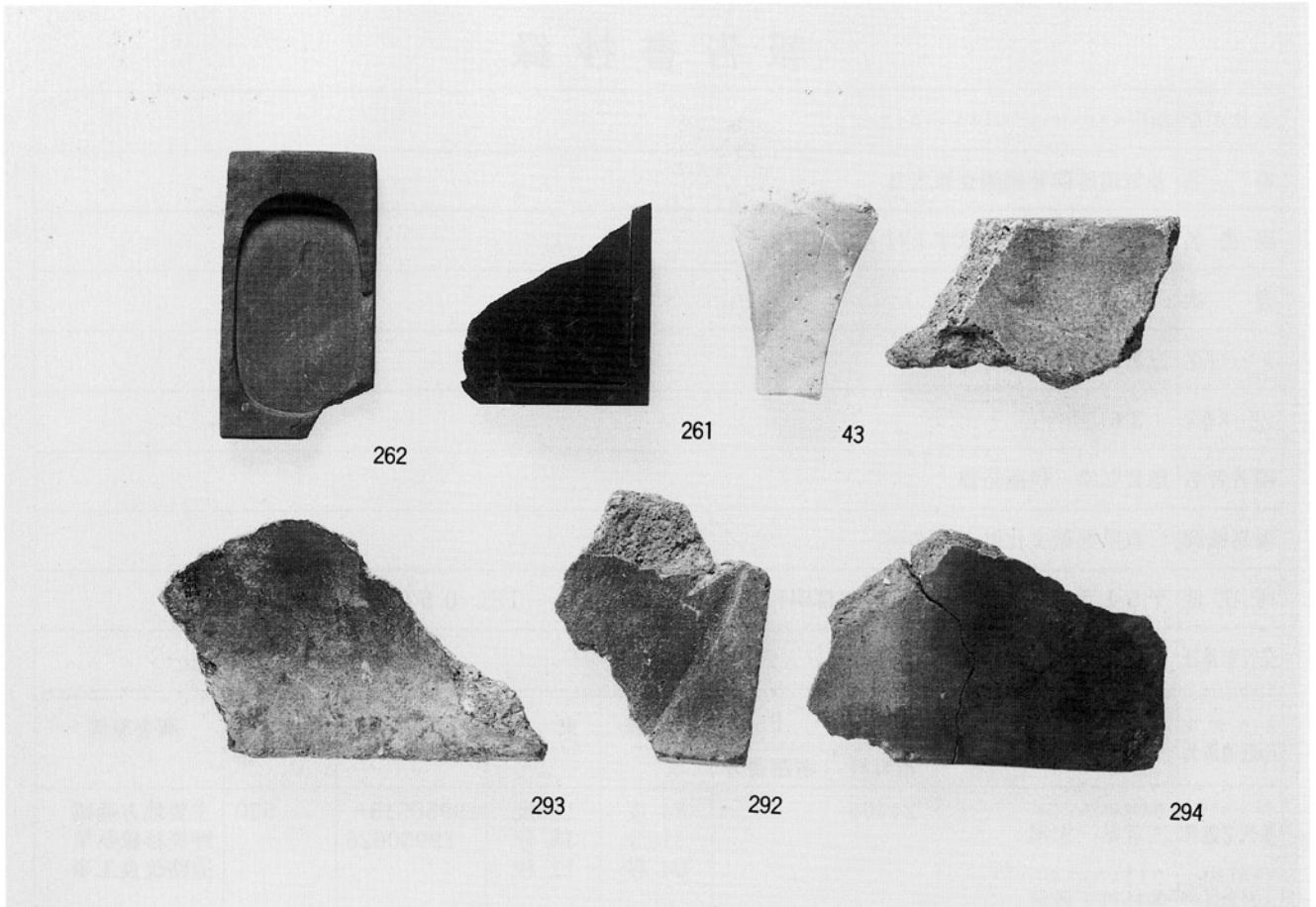
中世後期の土師器類



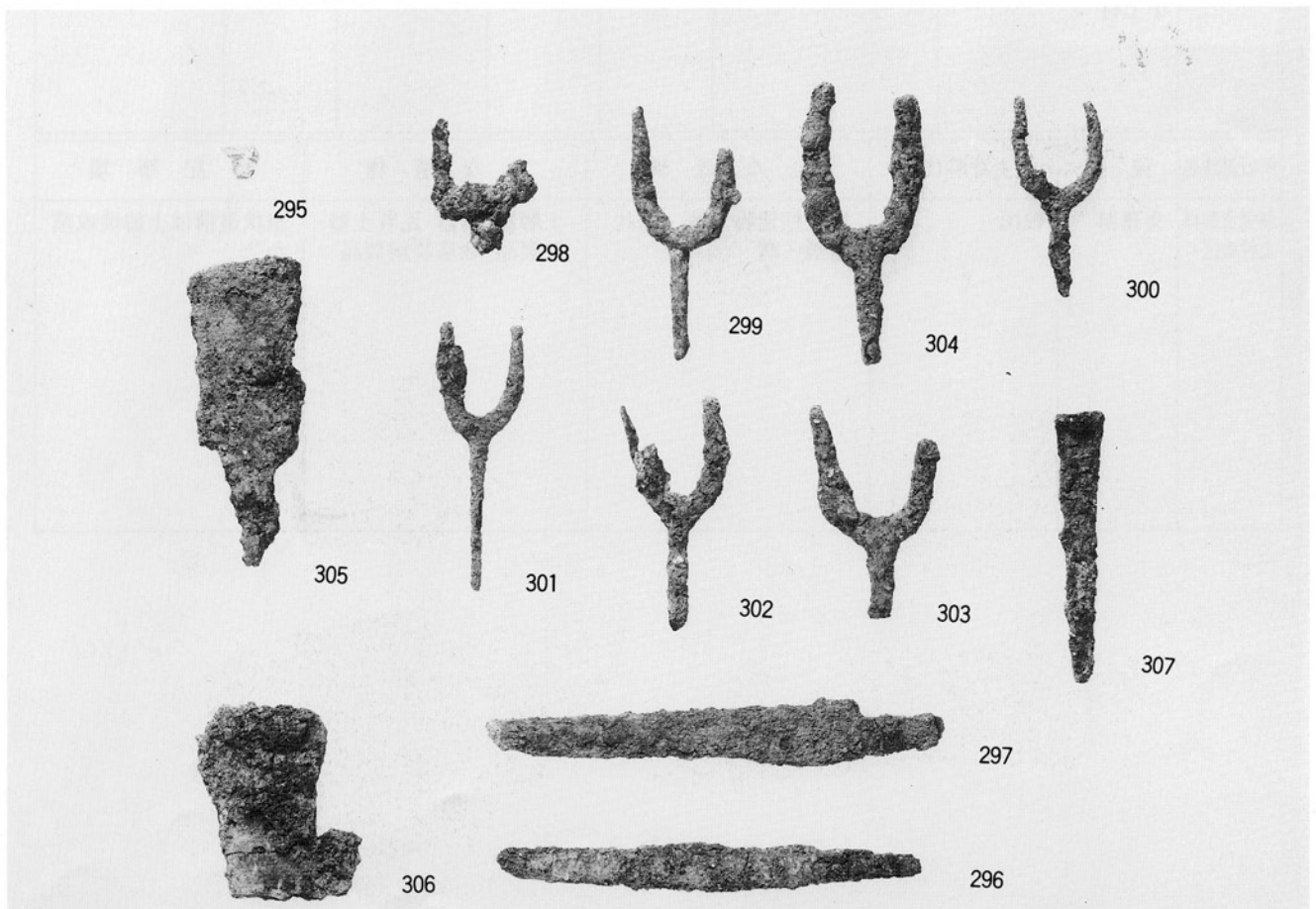
陶器・磁器類



陶器・瓦質土器類



石製品・瓦類



金属製品類

報告書抄録

ふりがな	たげいせきぐんはつかつちようさほうこく2							
書名	多気遺跡群発掘調査報告Ⅱ							
副書名	一志郡美杉村下多気字上村所在							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財センター							
シリーズ番号	136							
編著者名	越賀弘幸 伊藤裕偉							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たげいせきぐん 多気遺跡群	みえけんいちしぐん 三重県一志郡	24406		34度 31分 04秒	136度 18分 12秒	19950515～ 19950626	520	主要地方道嬉 野美杉線県単 道路改良工事
かみむらちく 上村地区	みすぎむらしもたげ 美杉村下多気 あざかむら 字上村							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
多気遺跡群 上村地区	集落跡	戦国	堀立柱建物・竈・窯状 遺構・溝		土師器・陶器・瓦質土器・ 鉄製品・金箔装銅製品		窯状遺構は土器焼成窯 か？	

平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 136

多気遺跡群発掘調査報告Ⅱ

——一志郡美杉村下多気字上村所在——

1996年3月29日発行

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷者 東海印刷株式会社